HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期の近代オリンピックとネイション概念の変容 ―チェコ・オリンピック委員会の動向をもとに―
Author(s)	福田, 宏; FUKUDA, Hiroshi
Citation	北大法学論集, 50(4), 434-388
Issue Date	1999-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14976
Type	departmental bulletin paper
File Information	50(4)_p434-388.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

初期の近代オリンピックとネイション概念の変容

——チェコ・オリンピック委員会の動向をもとに——

福田　宏

目　次

はじめに
1　社会におけるオリンピックの位置
2　対立の予兆——1906年のアテネ中間大会まで
3　政治化するオリンピック
4　「国家的事項」としてのオリンピック
5　政治問題としてのオリンピック
　　——チェコ・オリンピック委員会の追放
おわりに

はじめに

1891年夏、二人の男がパリで顔を合わせた。一人は、イジー・グート（Jiří Guth, 1861-1943）[1]というチェコ人の学校教師であり、丁度この時、オーストリアの文化教育省から奨学金を獲得して二ヶ月間の予定でパリに滞在し、フランスにおける体操教育の研修を行っていた。もう一人は、クーベルタン男爵

(Pierre Fredy Baron de Coubertin, 1863-1937)。いうまでもなく後に近代オリンピックの創設者として名を残す人物である。しかしながら、両者は以前からお互いを知っていたわけではない。体育についての資料を漁っていたグートが知り合いから当時はまだ無名であったクーベルタンの名を耳にし、しかもパリに住んでいるという情報を得たことから、彼を捜し出して対面しただけのことであった[2]。グートはクーベルタンに対し、チェコの体育と体操団体のソコル(Sokol)[3]について語り、クーベルタンはグートに対し、会うべき人物の名前と文献のいくつかを伝え、それで別れたのであった。当時、クーベルタンはオリンピック復活のアイデアを温めつつあったと思われるが[4]、この時の会話ではオリンピックは話題に上っていない。しかしながら、この全く偶然とも言える出会いが、ほぼ半世紀にわたる二人の親交を生みだし、オリンピックとチェコ人を結びつけるきっかけとなったのである。

グートは、ハンガリーのケメーニ(Ferenc Kemény)と並んで1894年に設立された国際オリンピック委員会(IOC)のメンバーに任命され、近代オリンピックの活動に最初から関わっていくことになる。ところが、興味深いことに、当時のチェコとハンガリーはオーストリア・ハンガリー二重帝国の一部であり、独立国家ではなかった。それにもかかわらず、両者がそれぞれ単独のネイション[5]としてオリンピックに参加し、オーストリアがIOCに代表を持たないという「異常事態」が発生したのである。当初はオリンピックにあまり関心を持っていなかったオーストリア政府も、その政治的意味を悟り、ハンガリーとチェコ、特にチェコに対して圧力をかけるようになった。政府によれば、「オーストリアは一つであり、チェコ人もまたオーストリア人としてオリンピックに参加しなければならない」のであった。最終的には、1914年の第六回パリ・コングレスにおいて、オリンピックに参加できるのは「政治的ネイション」だけである、という決定がなされ、オーストリアの一部であったチェコとロシアの一部であったフィンランドは単独のネイションとしてオリンピックに参加する権利を剥奪されたのである。

クーベルタンの考えによれば、オリンピックは世界各地からやってきたネイションがスポーツを通して交流を深める場所であって、偏狭なナショナリズムを助長したり国家間対立に悪用されるものでは決してなかった。しかしながら、「民族問題」が深刻になりつつあった当時において、人々の注目を集め得るこうした国際的な祭典が、ナショナリズムの影響を受けないはずはない。オリン

ピックは、ネイション間の平和的交流といういささか牧歌的なイメージではなく、実際にはネイションや国家の自己アピールの場所となり、政治的な意味を獲得していくのである。その過程においては、オリンピックに参加できるネイションとは何か、という議論が生じ、最終的にはチェコ人のように国家を持たないネイションはネイションでないと判断されてしまったのであった。本稿では、こうした過程に着目し、オリンピックにおけるネイション概念がどのように変化していったのかを追っていきたいと思う。しかしながら、まず最初に問わねばならないのは、その変容が、当時の社会全体に流通していたネイション概念の変化をどの程度反映していたのか、という問題である。第1章では、まずその点を明らかにするために、社会におけるオリンピックの位置を確認しておきたい。その上で、第2章以下において近代オリンピックにおける「民族問題」を具体的に考察し、ナショナリズム研究におけるオリンピックの重要性を浮き彫りにしたいと思う。

ただし、本稿は新しい歴史的事実の開拓を意図したものではない。少なくとも、チェコ体育・スポーツ史の文脈においては、1970年代よりケスル（Jiří Kössl）とコラーシュ（František Kolář）がオリンピック史の研究を行ってきており、本稿も主として彼ら二人の業績［22-25, 27, 28, 30, 31, 35］に依拠している。だが、体育学の領域を一歩離れると、オリンピックに対する学問的関心はたちまちのうちに氷解してしまうのが現状であり、体育学以外で初期オリンピックの問題に言及した研究は非常に少ない。この点は、チェコだけでなく日本を含めた多くの国で共通に見られる現象である。70年代頃より、カナダ、アメリカ、イギリスなどにおいても体育・スポーツ史に関わる研究が活発化したものの、それは体育学の領域を大きく越えて広がるものではなかった。日本でも、1977年から78年にかけて刊行された五巻組の『スポーツを考えるシリーズ』は注目に値する業績であるが、それが広範な関心を引き起こしたわけではない。アメリカのマカルーンは、その優れた著作『オリンピックと近代』［38］（1981年）において、オリンピックに対する「学問上の空白」は「文化人」が社会の遊戯的側面、すなわちスポーツ一般に対して侮蔑の眼差しを送った結果であると断じているが(6)、今日においてもその「空白」は依然として埋められていない。本稿は、こうした点を踏まえた上で、体育史の中だけで完結しているオリンピック研究を政治史や社会史なども含めたより広い領域に引っぱり出すことも一つの目的としている。

ちなみに、日本では、長年にわたって実際のオリンピック活動に携わってきた鈴木良徳が、チェコ人やフィンランド人の代表権をめぐる問題についての言及を早くから行っている。だが、それは政治の介入からオリンピックを守った「先駆的な事例」としての紹介に留まっているにすぎない(7)。彼によれば、当時は政治的単位ではなかったチェコやフィンランドをオリンピックに参加させたのは、政治とは関係のないスポーツ独自の領域を守ろうとするクーベルタンらIOCの卓見なのであった。しかしながら、近代オリンピックが「復興」された当時は、主権国家を有するかどうかという点はそもそも問題になっていなかったし、スポーツの非政治性を確保するという確固とした理念の下にチェコの参加が要請されたわけでもない。それにもかかわらず、平和の祭典としてのオリンピック・イメージが後に一般化されてくると、こうしたチェコやフィンランドの事例もまた、スポーツは政治的ではあり得ないという素朴な観念を補強するものとして解釈されてしまうのである。本稿における考察は、限定的ながらもこのようなオリンピック聖域論を掘り崩す一つの布石となるものと考えている。

なお、冷戦の終了と相前後して、中欧地域における共同のオリンピック史研究が開始され、チェコスロヴァキア（当時）、ハンガリー、オーストリアの三カ国によるオリンピック史の刊行が企画された。実際には、オーストリア、ハンガリーの二カ国分しか刊行されなかったものの、チェコにおける研究成果は本書［43］、および1995年に出版されたオーストリア単独のオリンピック史［42］に反映されている。また、ドイツとチェコによる共同研究も行われ、その成果がチェコ・オリンピック委員会の内部資料［32］として1995年にまとめられている。しかしながら、ドイツ語圏の体育史研究者にとってはスラヴ語であるチェコ語の壁は厚く、また、共同研究が始まって日が浅いこともあり、基本的な事実関係をめぐってもチェコ語圏とドイツ語圏の研究には食い違いが見られる。

1　社会におけるオリンピックの位置

1.1　初期オリンピックのイメージ

現在のオリンピック競技は、世界で最もインパクトの強いパフォーマンスの一つと言って良いであろう。世界各地からスポーツ選手と観客が集まって祭典に参加するというだけではない。テレビによる視聴者を含めれば、数十億の人間が同じ瞬間にオリンピックという一大イヴェントを目撃していることにもなろう。そのように考えると、オリンピックの持つ影響力は計り知れないほど大きいし、実際、1980年のモスクワ大会や1984年のロサンゼルス大会のように、東西陣営による双方のボイコットによってオリンピックそのものが政治的対立の前面に押し出された例も見られる。その点では、この祭典は、ネイションにとって、また国家にとって、自らの存在を外にアピールする絶好の機会であり、単なるスポーツ競技としては片づけられない政治的要素を含んでいると言えよう。

しかしながら、現在のオリンピック・イメージを基にして初期のオリンピックを捉えることはできまい。19世紀の後半より本格化した古代オリンピアの発掘にヨーロッパの関心が集まっていたとはいえ、実際にオリンピック競技を復活させようとする試みは散発的になされていただけであり、今日のようなオリンピックの登場を予想できた人間は存在しなかったであろう。クーベルタンが提示したオリンピック復活案にしても、どちらかと言えば、一人の無名貴族によって提案されたいささか突拍子もないアイデアでしかなかったのである。1892年11月25日、フランス競技スポーツ連合（USFSA, Union des sociétés françaises de sports athlétiques）の創立五周年記念行事 —— 本当は五周年ではなかったのだが —— において、彼はオリンピック復興のアイデアをぶち挙げるが、それは完全なる失敗に終わったのであった。

> センセーショナルな決議の宣告によって、私は自分の演説を締めくくろうと考えていた。それは、オリンピック競技を早急に復活させるというアピールであった。しかし何も起こらなかったのである！
> もちろん、予想される反応については何でも受け止める覚悟ができていた。だが、こんな反応が帰ってくるとは。反論？抗議？皮肉？それとも無視？…そんなものでは全然なかった。みんなは拍手を送り、同意の意志を示し、私に対して成功を祈る言葉までくれたのである。しかしながら、誰も私のアイデアを理解していなかった。完全で絶対的な無理解がそこで生じたのである。それは長い期間続いたのであった(8)。

実際、1896年の復活第一回アテネ・オリンピック[9]を除けば、万国博覧会と抱き合わせで開催された1900年の第二回パリ大会や1904年の第三回セントルイス大会は惨憺たる結果であった。ここでは、主役はあくまで博覧会であり、オリンピックは脇役的な存在でしかなかった[10]。クーベルタンの言葉によれば、オリンピックの「哲学的価値」や「教育的意義」は博覧会の中に「消え去り」、「無意味なものに」なってしまったのである[11]。パリ大会の円盤投げで二位をおさめ、チェコ人としては初めて表彰されたヤンダ＝スーク（František Janda-Suk）が受け取った褒賞も貧弱なものであった。グートは以下のように回想している。

> パリ大会の最後に行われた表彰式の会場は、ブローニュの森にあるフランス・レーシングクラブであったが、それほど惨めな表彰式はなかった。青空の下での宴会のような感じで、ほとんど居酒屋の雰囲気であった。そして、どこか片田舎の競技でもらえるような傷物の装身具が渡されたのである[12]。

しかしながら、予算上の関係で、こうしたオリンピックと博覧会の「夫婦関係」は1908年に仏英博覧会と平行して開催されたロンドン大会までも継続したのである。その後、1912年の第五回ストックホルム大会からは、規模も徐々に拡大されていくが、それでも博覧会を凌駕するようなものではなかった。吉見の指摘するとおり、オリンピックと万国博の関係が完全に逆転したのは、1936年のベルリン・オリンピックの時であったと言えよう。この大会の開催が決定されたのはナチスが政権を獲得する前であり、ヒトラーは当初オリンピックに関しては全く関心を持たなかったという。だが、すぐにその価値に気づいた彼は、壮大なスタジアムを建設し、見事に演出された大会を内外に見せることによって、第三帝国の正当化を図ったのである[13]。この点については、レニ・リーフェンシュタールによって撮られたベルリン大会の映画『オリンピア』から図らずも読みとることができよう。

1.2 スポーツと体操 —— ネイションにとっての意味づけ

1894年、オリンピックの復活をテーマとしたUSFSAの会合 —— 後に第一回

オリンピック・コングレスと呼ばれるようになる――が開かれた時、ベルギー体操連合（Union des Sociétés Belges de Gymnastique）の会長であるキュペルス（N.S.Cuperus）は、その招待状に対して以下のような断りの返事を出したのであった。

> 我々の団体は、体操とスポーツは互いに相容れないものであるとこれまで常に信じてきましたし、今もそう信じております。そして我々体操家は、スポーツというものに対し、体操の原則に反するものとして常に反対の意を表明してきたのであります(14)。

1896年の第一回アテネ大会が終了した直後には、『ソコル』（体操団体ソコルの機関誌）において、ヨーロッパ各地における「多くの体操団体がオリンピック競技に反対している」事実が紹介され、スポーツに反対するキュペルスの意見が説得力を持つものとして評価されている。

> 「体操は、人間身体の調和的、かつ最良の発展を適合的な訓練によってもたらすことを目的としている。それに対し、スポーツは身体上の一面的な力を完成させ、卓越させることを公言してはばからない。体操は健康を促進させ、強さ、柔軟性、そして特に身体的美を正しく発展させる。スポーツは、身体の一部分だけを鍛錬するものであり、他の部分を害し、部分と部分のバランスを犯し、馬鹿げた考え方によって健康と美を損ねてしまう。スポーツは、賞を獲得するという名目のもとでプロフェッショナリズムを助長し、ごまかしをも辞さない。体操は、こうした破廉恥なものからは縁遠いものである。…［ただし］、走ることには我々体操家も熱中しているし、フェンシングもほとんどの［体操］協会においてトレーニング・プログラムの中に採り入れられている。水泳は、しばしば公開体操の一つとして採り入れられている。スケートも我々体操家のお気に入りであると同時に、効果的な訓練の一つとして見なされている。乗馬やサイクリングも生活上に必要なものであり、訓練の一つとして見なされている。…」(15)

このように、当時の体操家たちは、フェンシングやスケートといったスポーツそれ自体を否定していたわけではない。彼らが嫌悪感を示したのは、他人と

競走することによって自己の優越性を求めるというその性格に対してであった。スポーツの発祥地であるイギリスとは対照的に、ヨーロッパ大陸では一般的に体操運動が発達し、健康で強力なネイションを形成するための集団体操に価値が置かれていたのである。

体操家たちの感覚からすれば、スポーツは以下の五つの点において体操よりも劣るものであった(16)。すなわち、第一にスポーツは個人的なものであり、他人に勝ろうとするエゴイズムを助長するものでしかなかった。第二に、身体の一部だけを鍛錬するという点において、スポーツは身体の調和を崩し、下手をすれば健康を損ねかねないものでもあった。第三に、スポーツは道徳的な価値を持っておらず、体操のように、心身のバランスのとれた発展を促すものではなかった。第四に、スポーツは身体能力に優れた一部のエリートを優遇するものであり、体操のような「民主的でナショナルなもの」とは違って「非民主的な」娯楽にすぎなかった。ソコルのように「ネイションに奉仕し、全体の利益のために個々人に犠牲を課す」ものではなく、スポーツはネイションのことを顧みない「インターナショナルな」ものにすぎなかったのである(17)。また、第五に、スポーツは費用のかかる娯楽であり富裕な階層しか参加できないものであった。ケスルの指摘によれば、当時の労働者や小市民層の体操家たちの間にはスポーツは時間と金を浪費するものでしかない、という認識が存在していた(18)。

クーベルタンがオリンピックの復活を提唱した時に直面したのは、こうした体操家たちの不信の目であった(19)。中でも、チェコ・ソコルは最も否定的にオリンピック競技を捉えていた体操団体の一つであり、グートもまた、ソコルの無関心に手を焼くことになる。だが、彼にとっては、国際的に見ても引けを取らないソコルを抜きにしては、オリンピックに出場する意味もなくなってしまうのであった。1896年10月5日付の手紙において、グートはクーベルタンに対して以下のように述べている。

> 我々の体操家、つまりソコルの参加がなければ、その他のチェコ人が［オリンピック］競技に出場したとしても、全く不完全なものとなってしまうでしょう。サイクリングクラブを除けば、我々の運動団体というのはまだまだ未発展なのです。…ですから、私はまず最初にソコルの賛同を得なければなりません。ソコルは非常に強力な団体ですから、彼ら

の参加さえ得られれば、我々ネイションの本当の姿をお見せすることができるでしょう(20)。

だが、ソコルの態度は一貫して否定的なものであった。ソコルの会長であり、機関誌『ソコル』の編集長でもあったシャイネル（Josef E. Scheiner, 1861-1932）は、1906年に開催されたアテネ中間オリンピック(21)について、ネイションにとっては何の意味もなさないものであると断じている。

…フランス、デンマーク、スウェーデン、ドイツの体操家がアテネに選手を派遣したのに、チェコ・ソコルの指導部はそうしなかったため、ソコルとしての課題を怠っているのではないか、という批判が寄せられている。…［しかしながら］、今日行われているようなオリンピック競技は、その大部分が、特別なトレーニングで鍛えられた少数のスペシャリストが何らかの体操部門で競い合うものでしかなく、ネイションの体操能力を示す規準とは絶対になり得ない。その意味では、ネイションにとってはオリンピックは何の意味もなさないのであり、ただ単に、世界から集まってきた観衆の前で、ネイションの構成員が何らかの賞を獲得したという出来事にすぎないのである(22)。

ただし、シャイネルはオリンピックを完全に否定していたわけではなかった。彼は、グートが『ソコル』でオリンピックに関する宣伝記事を書くことを許可しているし、ソコルとしては正式にオリンピックへの参加を認めなかったものの、メンバーが個人の判断でオリンピックに参加することは容認していた。また、1906年のアテネ中間大会の時と、オーストリアからの圧力が強まった1914年にはヴァニーチェク（Jindřich Vaníček, 1862-1934）をソコルの代表としてチェコ・オリンピック委員会に派遣し、オリンピックの活動に協力する姿勢を見せてはいる。だが、ヴァニーチェク自身、「オリンピックに対する反感を隠したことのない」(23)人物であったし、1914年のパリ・コングレスにシャイネル自身が参加したときにも、オリンピックからチェコが追放されようとする瞬間ですら、ほとんど何も発言していないのである(24)。なお、ソコルがオリンピックに対して肯定的な態度を取り始めるのは、第一次大戦後のことであり、団体として正式に選手を派遣し始めたのも1920年のアントワープ大会からであっ

た[25]。ただし、スポーツは体操よりも格が低いもの、という解釈は1930年代まで継続した。例えば、1931年にはソコルの講義録シリーズの一冊として『ソコルとスポーツ』が出版されているが、そこでは、スポーツはあくまで二次的な意味しか持たず、「体操がスポーツよりももっと深い意義を持っている」という点が強調されていたのである[26]。

以上、本章で見てきたように、初期のオリンピックは人々の注目をそれほど集めていたわけではなかったし、スポーツに対する体操家の不信感も根強いものであった。さらに、スポーツ界の内部においても様々な対立が存在していたことを考えると[27]、当時の社会において一つのスポーツ・イヴェントを創り上げる作業はそれほど容易ではなかったと考えられる[28]。その点についてはチェコも全く同じであり、グートは、オリンピックにおけるネイションとしての地位を守るために、非常に孤独な闘いを強いられたのであった。彼を熱心に支持した人物はわずかに数名であり、ソコルや政界における関心は僅かなものであった。当時における身体運動の中心は何といってもソコルであり、グートの活動は周辺的なものでしかなかったのである。その意味では、オリンピックにおけるネイションをめぐる議論は、当時の社会におけるネイション概念の変容をそのまま反映するものであったとは考えにくい。したがって、我々がこれから見ることになるチェコ・オリンピックの活動は、社会全体から見ればあくまで周辺的なものにすぎなかったという点を押さえておく必要があろう。

2　対立の予兆 —— 1906年のアテネ中間大会まで

2.1　1896年の第一回アテネ大会

1894年、オリンピックの復活をテーマとするコングレスの招待状がグートに届いた。しかし、当時の彼はオリンピックに対する関心を持っておらず、コングレスに祝電を打っただけであった。

> パリに行こうなどとは全く考えなかった。お金がなかったし、もし休暇が取れるのだったら、もっと未知の世界、言ってみればエキゾチックな世界に行ってみたいと思っていた。ちょうどこの時、[次の] 休みにギ

リシアと小アジアに行く予定があり、それ以外のことを考える余地はなかったのである[29]。

それにもかかわらず、グートは、同じくコングレスを欠席していたハンガリーのケメーニと共に新しく創設されたIOCのメンバーに選出されたのであった。グートは、IOCに選出された理由をチェコ人に対するクーベルタンの「共感」に帰しているが、国際的にある程度知られていたソコルの存在に負う部分もあると思われる[30]。いずれにせよ、この時には、IOCに選出されたことがいかなる意味を持つかについて、グートは全く知らなかったし、また考えようともしなかったのである。

1896年3月末、グートはIOCのメンバーとしてアテネに出かけたものの、復活された近代オリンピックに取り立てて大きな関心を持っていたわけではなかった[31]。しかしながら、実際に大会を目にしてみて彼の考え方は変わった。特に、勝利の儀式[32]は、チェコ人のような「抑圧された」ネイションにとって自らの存在をアピールする格好の機会と映った。復活された近代オリンピックの存在をチェコ人、特にソコル会員にアピールするために書かれた記事の中で、彼は以下のように述べている。

> …もし、スタジアムの中の大観衆が我々チェコ人についても多くの情報を与えられ――自分自身の経験に基づいて私はよく知っているけれども、外国では今のところ我々のことについてはあまり知られていない――一度に十万人の人間がスラヴの中でも最も小さい枝［チェコ人のこと］の存在に気づく、といったような光景を想像すると、［チェコ人がこのオリンピックに参加しなかったことが］ますます残念に思えてくるのだ。［もちろん］、こうしたアテネでの勝利が我々の苦しみを取り除いてくれるからといって、学問や芸術、その他の分野における努力を止めてしまうべきだなどと私は思わない。しかしながら、この機会をそのまま棄ててしまうのはもったいないではないか[33]。

アテネ大会の感動冷めやらぬままにチェコに帰ってきたグートは、早速、クーベルタンに書簡をしたため、「この夏の間にチェコ・オリンピック委員会を設立するつもりです」と知らせたのであった[34]。オリンピックをネイション間

の交流の場と考え、世界平和の一手段として捉えようとしたクーベルタンとは異なり、グートが重要だと考えたのは、「参加者の数」ではなく「その能力」を示すことなのであった(35)。が、ソコルからの積極的な反応はなく、オリンピック委員会の設立にも失敗してしまう。彼は、さしあたりの仕事として、チェコ・サイドにおけるオリンピック活動の受け皿づくりを目指すこととなる。つまり、総合的なチェコ・スポーツの団体、チェコ・アマチュア運動競技連合（ČAAU, Česká atletická amaterská unie）の設立であった。グートは、1900年の第二回パリ大会に備えるために、1897年5月に誕生したこの団体を中核として99年春よりオリンピック委員会の創設準備を始めたのである。1900年3月28日には、当委員会を常設団体とすることが決定されたことを考えると、1899年から1900年にかけての期間にチェコ・オリンピック委員会が成立したとみなすことができよう(36)。

2.2 国家とネイションの問題

なお、このアテネ大会の期間中に行われたIOCの会合では、オリンピック参加の基本単位となる各ナショナル・オリンピック委員会（NOC）の組織のあり方が議題となっている(37)。ドイツのゲプハルト（Willibald Gebhardt）は、ナショナル・オリンピック委員会は国家からの支援を基本にして構成されるべきだと主張したのに対し、スウェーデンのバルック（Viktor Balck）は、あくまで私的団体として構成されるべきだと主張した。前者の考え方では、チェコ人としてのオリンピック参加が危うくなると判断したグートは、当然のことながら後者の立場を支持した。クーベルタンも後者の立場を支持したものの、この会合では決着が付かず、各IOCメンバーの裁量に任されることとなった。結果として、チェコやフィンランドのように自らの国家を持たないネイションであっても、オリンピックに参加できる可能性が事実上生み出されたのであった。

だが、グート本人は、アテネ大会においてはネイションよりもギリシア国家の存在が前面に押し出され、大会そのものが国家単位の競争という性格を帯びた事実を認識していた。彼は、チェコ人がオリンピックに参加し続けるためには、オリンピックをネイション中心のイヴェントに改造しなければならないことを意識していたのである。例えば、1900年のパリ大会に向けた準備の中で、グートは次のように発言した。

一回目のオリンピックの際には選手たちは国家を代表して競技したのであり、ネイション単位ではなかった。だから、我々の参加の際にはネイションを代表しての競技を要求しなければならない(38)。

しかしながら、実際のオリンピックにおける参加資格の規定はまだまだ緩いものであり、ネイションや国家といった枠組みはそれほど厳密には認識されていなかったのも事実である。例えば、1900年のパリ大会には、チェコ代表として初めて5名の選手が派遣されたが、それ以外にも個人の資格で参加したローゼンバウモヴァー（Hedwiga Rosenbaumová）というチェコの選手がいたのである。「プラハ代表」と称していた彼女は、テニスのシングルで三位を獲得し、次いで混合ダブルスでもイギリス人のヴァルデン（Anthony A. Warden）(39)と組んで三位を獲得したのであった。あるいは、オーストリア代表としてパリ大会に参加していたヴァーレ（Otto Wahle, 1879-1963）の父親は、保険会社の官吏でプラハ出身のユダヤ人であった(40)。その後、ヴァーレ本人はニューヨークに移っており、1904年のセントルイス大会の時には、オーストリア人でもアメリカ人でもなく個人の資格で参加し、水泳で三位を獲得している。一方、同じくオーストリア代表としてパリ大会に参加し、フェンシングのサーブルで三位を獲得したフレッシュ（Siegfried Flesch）は、ブルノ（チェコ）で最初のフェンシングクラブを設立した人物として知られているし、大会の公式記録では誤ってハンガリー選手と記録される、というややこしさである。

他にも興味深い事件としては、チェコ人選手がパリ大会でミスによってハンガリー人と記されたり、アメリカ人にされたり、「ウィーンのオーストリア人」と書かれたした、という事例が挙げられよう(41)。チェコ人側がこの件に抗議したところ、『スポーツ・ジャーナル』（Journal des Sports）紙上で「チェコ人はオーストリア人ではない」という配慮に欠けた訂正記事が出されたため、ウィーン当局からチェコ人側が批判を受ける羽目となった。しかも、チェコ側は「チェコ人はオーストリア人でもある」という訂正記事の掲載を求めたが、それに対する反応はなかったのである。

2.3 オーストリアにおけるオリンピックへの関心

1894年のパリ・コングレスを開催するに当たっては、オーストリア政府にも

招待状が出されているものの、文化教育省が感謝状を出しただけで出席はしていない(42)。しかし、オーストリアではアテネ大会のために準備委員会が設立され、三名の選手が実際に派遣されたのであった。1896年には、1900年の第二回大会がウィーンで開催されることを期待する記事がウィーンで出されているし(43)、1900年になってからは、フランツ・ヨーゼフの侍従が「パリ大会に間に合うように」オーストリアにもIOCへの代表を出させるべきだと主張している(44)。が、実際には、1905年にゾルムス＝ブラウンフェルス公子（Prinz Alexander Solms-Braunfels）が任命されるまではオーストリアはIOCに代表を有しなかったし、オリンピック・コングレスにしても、初めて正式に参加したのは1913年にローザンヌで行われた第五回コングレスの時であった。基本的には、オーストリアにおいてもオリンピックへの関心はあまり高くなかったのである。

オーストリア側のマスコミで初めてチェコのオリンピック参加が問題視されたのは、おそらく1904年であったと考えられる。俗にオーストリア・スポーツの父と呼ばれるジルベラー（Viktor Silberer, 1846-1924）が、自ら創刊した雑誌『総合スポーツ新聞』紙上において、同年にロンドンで開かれたIOCの会合にオーストリアが参加しなかったことを批判する文章を書いたのであった。

> ［ロンドンの会合では］オーストリア、つまり、古い帝国であり「大国」であるはずのオーストリアの姿は見いだせなかった！　オーストリアは代表を出していないのにハンガリーが単独で出席していることに人は気づくであろう。そして何と素晴らしいことか！「ボエーム［ボヘミアの仏語］」(45)、つまりベーメン［ボヘミアの独語］が、あたかも自立した国であるかのような顔をして、大国であり世界的ネイションであるフランスやイギリス、ドイツ、ロシアと一緒にいるのだ。国際オリンピック委員会のメンバーであるこの「ボヘミア代表」はイジー・グートという名前である。オーストリアの大臣の方々はこれについて一体どうお考えか？(46)

3　政治化するオリンピック

3.1　1906年アテネ中間大会における最初の対立

オリンピックをめぐってオーストリアとチェコとの間に初めて対立が生じたのは、1906年のアテネ中間大会の時であった(47)。オリンピック開催に非常に大きな力を入れていたギリシア政府は、各ナショナル・オリンピック委員会に助成金を交付したのであったが、オーストリアの委員会とハンガリーの委員会にそれぞれ交付しただけで、チェコ・オリンピック委員会には交付しなかったのである。ギリシア政府の解釈では、チェコの委員会はオーストリアの委員会に属する組織であるため、オーストリア側に渡された3000フランからその三分の一を配分してもらうべきであった。しかしながら、グートがウィーンに出向いて助成金の配分を要求したところ、オーストリアのヴィルチェク伯爵（Hans Graf Wilczek, 1837-1922）は、チェコの委員会はオーストリアから独立した団体であるため、助成金を配分することはできないと答えたのであった。結局、チェコ・オリンピック委員会は、ギリシア政府から直接1000フランの交付を受けることとなる。この一件は、チェコの委員会が独立した存在として直接助成金を獲得することに、オーストリア委員会が特に抵抗を感じていなかったことを示している。

一方、旗の掲揚をめぐる問題が、ドイツ体操家連盟（DT, Deutsche Turnerschaft）の機関誌『ドイツ体操新聞』で紹介されている(48)。それによると、勝利の際には、オーストリアの旗ではなくチェコの旗をスタジアムで掲揚するようにチェコ人が要請したものの、「チェコという国家は存在しない」という理由で拒否されている。同じように、ハンガリーや英連邦のキプロスも拒否されたのであった。そして、グートの数少ない協力者の一人であったレスラー（Josef Rössler-Ořovský）によれば、開会式に参加するにあたり、チェコ選手たちは「オーストリアとの対立を避けるために」支柱付きの赤・白のチェコの旗を掲げては歩かなかった。ただし、スタジアムの貴賓席に座っているギリシア王室とイギリス王室、および世界各地からの代表に見えるように、二人のチェコ選手が赤・白の旗を持って歩いていたのであった(49)。

3.2 1908年ロンドン大会における「ボヘミア王国」

しかしながら、オリンピックが本格的に政治的な問題として意識されるようになったのは、1908年のロンドン大会以降と考えて良いであろう。中でも、この大会から開始された開会式の入場行進は象徴的な意味を持っていた。いわゆ

るABC問題の登場である。入場行進では各選手団がアルファベット順に歩くことになっていたために、名前がAから始まるオーストリア（Austria）が先頭で次にベルギー（Belgium）、三番目にチェコ（Bohemia）という風に行進することとなった。つまり、チェコ人は、オーストリア選手団とは別個に、赤・白の旗と「ボヘミア（Bohemia）」と書かれたプラカードを持って歩いたのであった。イギリスのマスコミが、この時のチェコ人の参加を「古いボヘミア王国」の参加として扱ったため、ウィーンのリベラル系新聞である『ノイエ・フライエ・プレッセ』は、チェコ人が「独立国家」と称しているとして非難し、在ロンドンのオーストリア公使館はこの一件に関してウィーンから「大目玉をくらった」のである(50)。また、ロシアがフィンランド選手団に対してロシア国旗を持つように要求したところ、憤慨したフィンランド側が旗なしで行進したという事件も発生した(51)。

こうしたABC問題と共に重要性を持っていたのが、ロンドン大会の一般規程として1907年のIOC会議で採択された21カ条の規約(52)であろう。同規程8条では、参加資格が明確に規定され、これまで個人やクラブの単位でもオリンピックに出場することが可能であったのが、すべてその国（country）のNOCを通して参加申し込みがなされることとなった。また、同規程6条では参加単位となる国（country）の定義が行われている。すなわち、IOCに単独の代表を有する領域（territory）か、そうした代表を有しない場合には単一または同一の主権の下にある領域が国と見なされるのであった。IOCに代表を有しているチェコについては、この時点では特に問題もなくオリンピックに出場できたのだが、むしろここで深刻であったのは、イギリス自治領の扱いをめぐって発生したアメリカとイギリスの対立であった。カナダや南アフリカ、オーストラレーシア（Australasia）といった各自治領が別々にオリンピックに参加していることにアメリカが反発し、イギリスの「特権」を排除して統一された英連邦選手団を形成するようにイギリスに迫ったのである(53)。結局のところ、各自治領は第一次大戦までイギリスとは別のチームとして参加することに成功したが、入場行進においては、ロンドン大会とストックホルム大会（1912年）共に、イギリスの前、あるいは後に続いて行進した。例えば、ロンドン大会では、開催国として最後に行進したイギリスの前を、オーストラレーシア、カナダ、南アフリカの順で選手が行進していたのである。他方、1906年のアテネ中間大会で単独のチームとして出場したアイルランドは、彼らの不満にもかかわらず、

ロンドン大会からはイギリスの名で出場することになり、結果として統一された「連合王国」選手団が結成されたのであった。

話をチェコに戻すことにしよう。ロンドン大会については、ウィーンの『ドイツ・オーストリア体操新聞』が詳細な報告を行っており、オーストリアからの参加者が「乏しい」ことを批判している。そして、ハンガリーとチェコについて以下のように述べたのであった。

> 彼ら［ハンガリー人］は、当然のことながら独自のネイションとして登場し、オーストリアの国歌が演奏されているときも――これまた当然のことながら――座ったままであった。そして、チェコ人もハンガリーの猿真似をしていた。彼らも自立したネイションとして登場し、自分たちの祖国を「ボヘミア」、つまり、違法な呼び名である「ベーメン」を使ったのである。ロンドンにおいて、オーストリアはかくも不愉快な状況に置かれていたのであった(54)。

一方、1905年よりIOCメンバーとなっていたオーストリアのゾルムス＝ブラウンフェルスは、グートをIOCから追放すべくさまざまな圧力をかけていた。例えば、1907年6月24日付の書簡では、「オーストリアの一地方にすぎないボヘミアが独自の代表を持つというようなことは絶対に容認できません」と書いているし、同年12月21日付の書簡では、「委員会［IOCのこと］における同格のメンバーとして、チェコ人と一緒に会合に出席しようとするオーストリアの代表は一人として存在しないでしょう」と主張している(55)。その一方で、彼は、「多忙のため」IOCメンバーを辞任したいと述べ、しかも、「オーストリアではオリンピックに関する関心があまり高くないので自分に代わる人間を見出すことが難しい」と書いたのであった。クーベルタンはゾルムス＝ブラウンフェルスに対する返事の中で以下のように書いている。

> グート博士は、IOC設立以来の――つまり14年半前からの――メンバーであることをお忘れにならないで下さい。そして、貴方に申し上げておきたいのですが、私の考えでは、IOCの中にはそのような［グートを除名するという］意見に賛成する人間は一人もいないでしょう。…我々はスポーツ上の地域自治ということを考慮しなければなりません。我々は

チェコを国家として受け入れたのではありません。スポーツ上の一つの中心として受け入れたのです(56)。

結局、ゾルムス＝ブラウンフェルスはIOCを辞任し、オーストリアは再びIOCに代表を持たない状態となった。なお、ゾルムス＝ブラウンフェルスは表立ってグートを攻撃することはなく、クーベルタンへの書簡など、あくまで目立たない形でグートをIOCから追放しようとしていた。グート自身、そうしたゾルムス＝ブラウンフェルスの意図をクーベルタンから聞いて初めて知った(57)のであり、オリンピックにおいてチェコの地位が脅かされているという危機感はまだ感じられていなかったと思われる。

4 「国家的事項」としてのオリンピック

4.1 ブダペストにおけるIOC会議――「オリンピック・ネイション」の定義

ストックホルム大会の準備が開始された頃から、サンクトペテルブルクやウィーンでは「嵐が巻き起こり始めた」(58)。新聞では、オリンピックの開会式における各代表団の入場行進の順番について報道がなされ、ウィーン政府は、オーストリア、ハンガリー、チェコの選手団は一緒に行進すべきなのか、それとも別々に行進しても構わないのか、といった「さして重要でもない問題」に多大な関心を持つようになった。政府や王室がオリンピックに干渉するようになり、オリンピックを「国家的事項」としてしまったのである。ロシア政府は、事態をあまり真剣に考えていなかったのか「それほど執拗ではなかった」が、オーストリア政府の態度は強硬であり、IOC側はチェコ・オリンピック委員会の同意の下で譲歩せざるを得なくなったのである。

さて、実際にオーストリアがオリンピックにおける「チェコ問題」に乗り出したのは、1911年5月にブダペストで開催されたIOCの会合の時からであった。1909年以来、オーストリア代表が存在しなかったIOCに皇帝の孫娘エリザベートの婿であるヴィンディシュグレーツ侯爵（Otto Fürst Windischgrätz）を送り込み、その彼に対して、フランツ・フェルディナント皇太子が、「オーストリア・ハンガリーの三分裂状態を解消し、かつオーストリア・ハンガリー

の二重主義があまり目立たないようにする」ことを要請したのである(59)。しかしながら、1911年のブダペスト会議においては、独立したチームとしてのチェコのオリンピック参加を排除することができなかった。ここで採択されたストックホルム大会の一般規程第6条では、オリンピックに参加する資格を持つネイションが以下のように定義されている。

> オリンピックにおける「ネイション」とは以下のものを指す。すなわち、IOCにおいて自らの代表を有する国（country）、そうした代表を有しないとしても以前のオリンピック競技で「ネイション」と見なされた国（country）、あるいは、国家連合の一部を成さない各主権国家、または、単一かつ同一の主権の下に置かれている国家連合、である。
>
> 「ネイション」あるいは「ネイション」がその一部をなすような主権国家に生まれつき帰属する者、または、その「ネイション」に帰化した者は、オリンピック競技の選手として当該「ネイション」を代表する適格者と見なされる(60)。

この定義に基づけば、IOCに自らの代表を有し、しかも、以前のオリンピックに単独の「ネイション」として参加しているチェコとフィンランドは、次回のオリンピックにも参加することが可能であった。その意味では、これはグートの勝利を意味していた。不満を持ったヴィンディシュグレーツはクーベルタンに圧力をかけたが、政治問題をIOCに持ち込みたくなかったクーベルタンは、オーストリアとチェコとの直接交渉によって「チェコ問題」を解決するように要請したのであった。後に、クーベルタンはこの時の苦悩を以下のように語っている。

> 一方では明白な政治的現実があるのに対し、他方では、我々をしっかりと支援してくれた諸国（pays）に対しても公正さを示し、感謝の念を示さねばならない。そんな中で私は困惑していた。私の個人的な感情については自分の職務上抑制しなければならなかったが、もし可能であるならば、ボヘミア（Bohéme）やフィンランドだけでなくポーランドやアイルランドにも［オリンピックに］参加するための場を与えようと考え

ていたのである。…私は、政治的な地勢とは異なる「スポーツ地勢（géographie sportive）」というものが確固として存在するということを常に主張してきた。我々がボヘミア（Bohéme）とフィンランドに有利な形で判断を下す結果となったのに対し、クロアチア・ソコルから前年に提出された[オリンピック参加への]要求に対しては、資格要件を満たしていないという理由で拒否の回答を出したのも、そうした点を考慮した結果である(61)。

4.2 グートとヴィンディシュグレーツの直接交渉

1911年の秋より行われたオーストリアとチェコの交渉において争点になったのは、次の四点であった。(1) IOCにおけるチェコ人メンバー、すなわちグートの地位について、(2)オリンピック競技におけるチェコ人の地位、(3)勝利の際の旗の掲揚、(4)チェコ人選手団の名称、についてである。しかしながら、両者の間で最も激しい論争を呼び起こしたのは四番目の名称問題であった。というのも、19世紀後半の「民族運動」においては、歴史的なボヘミア王冠の地（Země koruny české）、すなわちボヘミア、モラヴィア、シレジアの一体性とそこにおける自治、つまりボヘミア国権の実現が大多数のチェコ人にとっての最終的な目標となっていたからである。この文脈においては、対外的な場で「ボヘミア（Čechy, Böhmen, Bohemia, Bohéme）」という地域名で呼ばれることがチェコ人にとっては重要であった。これに対し、オーストリア当局は、国権を想起させる「ボヘミア」を使わせることに神経質になっており、地域名よりもナショナリティーを示す「チェコ人（Češi, Tschechen, Czechs, Tschéques）」を使うように要求したのであった。当然のことながら、こうした対立は、オリンピックにおけるチェコ人の名称問題にも影響を及ぼしていたのである。

ヴィンディシュグレーツは1912年1月16日付の書簡において、以下のような論理でチェコの「ボヘミア」という名称に反対した。

ボヘミアの人口の5分の2がドイツ人であることを考えると、[IOCメンバーのリストにおいて]貴方の名前のところにボヘミアという名称をつけるのは根拠がないと思われます。貴方はボヘミアにおけるチェコ人を代表しているのであり、私はボヘミアにおけるドイツ人を代表してい

るわけですから[62]。

これに対し、チェコ側は、あくまでも「ボヘミア」という名称にこだわっていたため[63]、両者の対立は表面化し、最終的には帝国議会における論争へと発展する[64]。だが、ストックホルム大会が間近に迫っていたこともあり、最終的な決定は、内閣メンバーを交えての直接交渉によって行われることとなった。

1912年6月9日、病気のシュトゥルク首相（K. Stürgkh）に代わってハイノルド男爵（Karl Freiherr Heinold）が司会役を務め、オーストリア・オリンピック委員会からはヴィンディシュグレーツ、コロレド＝マンスフェルト伯爵（*Rudolf Graf Colloredo-Mansfeld*）、ヘルシュマン（*Otto Herschmann*）、チェコ・オリンピックからはグートが出席して話し合いが行われた。チェコ側からの人間はグート一人、しかも彼にとっては「あまり得意ではない」ドイツ語での交渉であったためだろうか、結果はオーストリアに「有利なもの」となり、「ボヘミア」という名称の代わりに「チェコ人」という名称が用いられることが決定された。具体的には以下のとおりである[65]。

(1) 競技者名簿における名称
オリンピック競技チェコ委員会[66]の同意の下に以下のことが決定された。すなわち、競技者および役員の名簿においては、名前のところに「オーストリア」（Autriche）と書かれ、さらに「チェコ人」（Tschéques）というナショナリティーを示すフランス語の単語が付け加えられる（したがって地域を示す単語ではない。あくまでナショナリティーを示す単語である）。なお、オーストリアからの他の参加者についても、自らのナショナリティーを表明したい場合には、これと同じ方法を取ることが認められる。

(2) IOCメンバーの名簿
この件に関しては、グート博士は「オーストリア」（Autriche）の項に含められ、さらに彼の名前の後にC.O.T.[67]という文字が挿入される。

(3) チェコ人参加者用のプラカード
プラカードは全く使用されないと思われるため、この項目は無用である。しかしながら、万が一用いられる場合には、第一項と同様、「オーストリア」（Autriche）と書き、その下にそれより小さい文字で「チェコ人」（Tschéques）と記すことになる。

(4) 旗の掲揚

旗が掲揚される場合には、帝国旗と併せて、それより小さいサイズで、勝利をおさめた地域の旗が掲揚される（ただし、三角旗ではない[68]）。したがってチェコが勝利した場合には、［帝国旗と併せて］白・赤の旗が掲げられる。

以上の合意は、翌6月10日にはチェコ・オリンピック委員会のメンバーにも通知され、彼らの失望を招いた。だが、チェコ選手団をストックホルムに派遣するためには他に選択肢はなく、オリンピック委員会はやむなくこの合意を追認する。しかしながら、政界をも含めてこの合意に関する議論が沸騰し、6月18日にはチェコ・サッカー同盟（ČSF, Český svaz footballový）が、6月22日にはチェコ・アマチュア運動競技連合（ČAAU）がこの合意に対する反対を表明し、後者は、すぐに撤回したとはいえ、自団体の会員に対してストックホルムへの参加を禁止するといった行動にも出たのであった[69]。

4.3 1912年のストックホルム大会――チェコの「勝利」？

ストックホルムに到着したチェコ選手団を待ちかまえていたのは、入場行進をめぐる新たな問題であった。当オリンピックの組織委員会から届いた通知によれば、行進時においては旗が使用されることになっており、その件に関しては、オーストリアとチェコの間には取り決めがなされていなかったためである。開会式の前日である7月4日、チェコ・オリンピック委員会の事務局長であったレスラーは、在ストックホルムのオーストリア公使館に赴き、書記のコロヴラット伯爵（Hanuš Graf Kolowrat, 1879-1955）[70]と数時間にわたる交渉を行った[71]。その結果、チェコ・チームは、オーストリアと別ではなく、オーストリアのすぐ後ろを行進することになったものの、黒・黄のオーストリアの旗だけではなく、それと同じサイズのチェコの旗も掲げることが認められたのであった。チェコ側は、ボヘミアの紋章の使用許可を事前に皇帝より得ていたことから、行進で使う旗にも写真［5］にあるようなライオンの紋章を使うことが許されたのである[72]。さらに、チェコ選手団が掲げるプラカードには、「オーストリア――チェコ人」と記されることになった。つまり、同年6月の合意のように「オーストリア」と書いて、その下に小さく「チェコ人」と書くのでは

なく、「オーストリア」と「チェコ人」を並べて一行で記すことが認められたのである(73)。当大会の競技においては一つもメダルを獲得できなかったとはいえ、少なくとも入場行進においては、写真［1］から分かるようにチェコは自らの存在をアピールすることができたのであった。また、英語で書かれたストックホルム大会の公式記録［8］では、チェコはチェコ人（Czechs）ではなくボヘミア（Bohemia）と記され、他のネイションと同格の扱いを受けている。唯一、オーストリアとチェコとの対立の跡が伺えるのは、一頁目に掲載されたIOCメンバーのリストにおいて、グートの名がオーストリアの中に含められ、「ボヘミア」――「チェコ人」ではない――と付け加えられている点であろう。その点から考えれば、チェコ人がこの大会において「他のネイションと全く同等の地位を得た」(74)というグートの言葉も全くの偽りとは言えまい。

一方、ハンガリーは、オーストリアに妥協してオーストリアとチェコの後ろを行進したが(75)、掲げていたのはハンガリーの旗一つだけであった［写真2］。また、大選手団を派遣したフィンランドは、当初、一人の女性選手がフィンランド女性体操連盟の連盟旗を掲げて先頭に立っていたが[写真3]、ロシア側が抗議したために、その女性は退場を余儀なくされ、途中からは旗なしの行進となった［写真4］(76)。だが、フィンランド選手は多くの競技において1位を収めたため、勝利の式典においては、ロシアの旗と共にフィンランドの旗が何度も掲揚されたのであった。

5　政治問題としてのオリンピック
――チェコ・オリンピック委員会の追放

5.1　チェコ・スポーツ基本政治綱領

1912年のストックホルム大会においては、チェコ側は独立した地位をかろうじて維持したが、その後のオリンピックについては不透明であったし、また、オーストリア政府がチェコ・オリンピック委員会に対してよりいっそう強い圧力をかけてくることは明白であった。そうした中で、チェコ系スポーツ諸団体の団結を図り、対外的な姿勢を統一するために、1913年3月より、グートのイニシアティヴによってチェコ・スポーツ基本政治綱領（Rámcový sportovně po-

litický program český）の作成が開始される(77)。同年12月５日には、確定された最終案がチェコ・オリンピック委員会の名で各団体に送付され、結果としては、ソコルやその他のスポーツ団体に承認されたのであった。しかしながら、(1)スポーツ団体間の対立が完全に解消されるにはいたっておらず、また、各団体が統一的な規範によって拘束されることを嫌ったこと、(2)ソコルや政界の関心を喚起することに失敗したこと、といった理由で実際には効力を持たなかったのである。

とはいえ、この草案には興味深い点が見られる(78)。第一に、ボヘミア王領、モラヴィア辺境伯領、シレジア大公領のいずれの出身者であっても、チェコ人はチェコ人として競技に参加しなければならない、という点である。つまり、ボヘミア人、モラヴィア人、シレジア人という区別を廃止し、チェコ人という一つのカテゴリーで彼らのすべてを包括することがここで主張されていた。こうした条項の存在は、当時においてモラヴィア人やシレジア人といった概念が根強く存在し、スポーツ競技の場で使われる場面が存在したことを示唆している。

第二に、チェコ人チームの名称として「ボヘミア」ではなく「チェコ人」を使うことを徹底させたという点である。もちろん、この背景には、「ボヘミア」という国権の主張を想起させるような名称を使用するのは実際には不可能であるという現実的な配慮が働いている。しかしながら、オーストリア側に対しても、「オーストリア」ではなく「オーストリア・ドイツ人」という名称を使うように要求している点を考えると、地域ではなくネイションを単位とするチーム編成を徹底させ、かつチェコ人という枠の存在基盤を固めようとする意図が伺える。

一方、ヴィンディシュグレーツはクーベルタンに対して手紙を出し、オーストリア内で領邦ごとにオリンピック委員会を組織させるつもりであることを伝えていた(79)。もちろん、それらの領邦ごとの委員会を統括するのは、ウィーンにおかれているオーストリア・オリンピック委員会であった。その結果かどうかは定かではないが、プラハではドイツ・サッカークラブ（DFC Prag, Deutscher Fussballclub Prag）の代表であるヴェルフェル（Karl Werfel）がボヘミア領邦ドイツ系オリンピック委員会を設立し、1914年１月には、ウィーンで開かれたオーストリア・オリンピック委員会の会合にその代表として出席している(80)。しかし、当委員会はドイツ人の団体として設立されたものであり、ボヘミアという地域を単位としたものではなかった。オリンピックだけでなく、

すべてのスポーツ競技でチェコ人とドイツ人の対立が深刻になりつつあったこの時点において、ボヘミアのチェコ人とドイツ人が協力して統一オリンピック委員会を創るという発想に至ることはおそらくなかったであろう。ヴィンディシュグレーツの意図とは裏腹に、当地ではチェコ人とドイツ人が別々にオリンピック委員会を形成する方向に向かっていたのであった。

5.2 オリンピック・コングレスの参加資格

オリンピック復活20周年記念となる1914年のパリ・コングレスを開催するにあたって、そもそも誰にその参加資格があるのか、という点が問題となっていた。次第に人々の注目を集め、肥大化する傾向を見せ始めていたオリンピック・コングレスも、その組織上の理由から、会議への参加資格を明確にしようという動きが出ていたのである。もちろん、そこにはナショナリズムも絡んでおり、ネイションの規模に応じた議席配分を行い、地位の「曖昧な」ネイションを放逐しようとする欲求も作用していたに違いない。1913年に行われたIOCの第15回セッションでは、その点についての明確な決定がなされている(81)。まず、コングレス参加者が三つのカテゴリーに分けられ、(1) IOCメンバー、(2) IOCによって承認されたナショナル・オリンピック委員会（NOC）の代表、(3) IOCによって承認されていないNOCの代表、と区分されたのであった(82)。「承認された」というのは、IOCに自らの代表を有しているNOCか、あるいはIOCとの合意がなされているNOCのことを指している。しかしながら、自らの代表がIOCを辞任したり、IOCとの合意が撤回された場合には、この「承認」も取り消されるのであった。また、承認されていないNOCは所属国家の外相からの委任を得たうえで三名ずつの代表を派遣できるものの、決議の際には参考票を出す権利しか持たない。

さらに、IOCによって承認されたNOCは以下の四つのグループに分類された。第一グループは、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、ロシア、アメリカであり各10名の代表を派遣することができた。第二グループは、ベルギー、日本、オランダ、オーストリア、ギリシア、スウェーデン、スイス、ハンガリーであり各6名の代表枠を持っていた。第三グループは、その他のNOCであり各5名の代表を派遣することができ、第四グループは、ルクセンブルク、モナコ、チェコ、フィンランドであり各2名の代表枠を持っていたのであった。チェ

コに関していえば、コングレスに参加することになったのは、IOC のメンバーであるグートと、チェコ・オリンピック委員会の代表として選ばれた当委員会事務局長のレスラー、チェコ・ソコルの会長シャイネルの二人、計三名であった。

5.3 1914年のパリ・コングレス

1914年6月15日、突然病気になったクーベルタンに代わり、IOC 副会長のヴィンディシュグレーツが第六回オリンピック・コングレスの開会を宣言した。6月8日のウィーンでの会談において「『民族問題』はこのコングレスでは議題にしない」という保証をヴィンディシュグレーツから得ていたにもかかわらず(83)、実際には、チェコ人の地位は危険にさらされたのであった。その日の午前のセッションが終了した後、チェコ人の代表3名はオーストリア側の代表に招かれ、非公式に話し合いを行っている。オーストリア側がチェコをコングレスから追放する —— すなわち、独立した単位としてのチェコがコングレスに参加する権利を剥奪する —— 案を提出する予定であることを表明したために、チェコ側が反発し、議論が紛糾した。結局、シャイネルの提案によって話し合いは一旦終了となる。「クーベルタン男爵のお宅に伺ってこの件について直接尋ねてみようではありませんか」。そこで、ヴィンディシュグレーツとコロレド＝マンスフェルト、グートの三人は、車でクーベルタンの住まいへと向かった。

パジャマ姿で彼らを出迎えたクーベルタンは、黙ってオーストリア側の提案を聞いた後、落ち着いた調子で答えた。

> しかし皆さん、それは無理ですね。チェコ人はここではチェコ人として出席しているのではないのです。イギリス人がイギリス人ではなく、ドイツ人がドイツ人でないのと同じように、です。ここでは、ナショナル・オリンピック委員会の代表、つまり、チェコ委員会、イギリス委員会、ドイツ委員会といった各委員会の代表が出席しているだけなのです。チェコ委員会からは二名の参加が認められていて、あなた方もそれについては一年以上前からご存じではありませんか。その時には、誰も反対しなかったわけですし。だから、チェコ委員会を［今すぐ］追い出すことはできないのです。まあ、もし次回のコングレスについてのチェコ・ネイ

ションの地位について話し合うことなら可能ですが …(84)

午後のセッションも、引き続きヴィンディシュグレーツの司会によって開始されたが、すぐにクーベルタンが登場し「盛大な拍手をもって」迎えられたのであった。そして、彼の目の前でオーストリア側がチェコをコングレスから追放する提案を、当初の案のまま、ドイツ語で読み上げ始めたのである。最初、ドイツ語を解しないクーベルタンはその提案を黙って聞いていたが、同じ提案がフランス語で繰り返されると、すぐさまそれをさえぎったのであった。「警告します。それは協定に反する提案です。…」 結局、その日は、クーベルタンのおかげで「チェコ問題」は議題にならずに終了した。

だが、翌16日に行われた午前のセッションでは、今度はドイツから「オリンピック・ネイション」に関する提案が出される。それによれば、1916年のベルリン大会以降のオリンピックにおいては「政治的ネイション」しか参加資格を持たないのであり、「政治的ネイション」ではないチェコとフィンランドは参加できないのであった(85)。これに対し、フィンランドを擁護するつもりであったスウェーデンが、ストックホルム大会における「オリンピック・ネイション」の定義に基づいて対抗提案を出した。彼らの主張においては、IOCのメンバーを有するネイション、あるいは過去のオリンピックに出場したことのあるネイションも「オリンピック・ネイション」とみなされるのであった。両者の提案をめぐって激しい議論が巻き起こったが、次第にドイツ側の案が優勢となっていく。チェコの反論に対し、「もしあなた方チェコ人に独立した地位を正式に与えるならば、イギリスのアイルランド人もロシアのフィンランド人も同じ地位を求めるようになるでしょう」(86)といった意見が出され、また、国内に多数のネイションを抱えるアメリカも、チェコ人に対して否定的な意見を述べ始めたのであった。グートの言葉によれば、彼らは「民族問題」を「悪魔か何かのように恐れていた」のである。議論の結果、「政治的ネイション」でなくても主権国家の承認が得られた場合にはスポーツ上の独自の地位が与えられる、すなわち、オリンピックに参加できる、という修正がなされたものの、基本的にはドイツ側の案が採用されたのであった。だが、オーストリア政府やロシア政府の合意が得られる可能性を持っていなかったチェコとフィンランドにとっては、修正があってもなくても同じであった。両者は、この決定によって、単独の団体としてオリンピックに参加する可能性を奪われてしまったのである。

5.4 「政治的ネイション」の意味するもの

ここで主張されていた「政治的ネイション」については注意が必要であろう。コングレスの詳細な議事録が存在しないため、「政治的ネイション」が正確に何を意味していたかについては明らかではないが、グートの回想録から判断する限り、「政治的ネイション」は主権国家を有するネイションと解されていた(87)。ただし、これをもって、競技に参加する基本単位が国民国家（ネイション・ステート）であるという通念がオリンピックの世界において定着したとみなすことはできまい。ここでは、オーストリア・ハンガリー二重帝国の一部分であるハンガリーが「政治的ネイション」の一つとして了解されていたことも事実である。ドイツの提案は、明らかにチェコとフィンランドの排除を狙ったものであり、ハンガリーへの攻撃を意図したものではなかった。実際、当セッションにおいては、ハンガリー代表はほとんど何も発言しておらず、彼ら自身が議論の当事者になっていたという状況ではなかったようである(88)。また、カナダ、オーストラリア、南アフリカなど英連邦に所属する自治領もここでは問題にされていなかった。要するに、ここで語られた「政治的ネイション」という言葉は曖昧さを残しており、政治的な理由によって使い分けされる余地を持っていたのである。

注意すべきもう一つの点は、オリンピック・コングレスではこうした「民族問題」がそもそも二次的な問題でしかなかった、という事実である。チェコの事情については、コングレスの参加者はあまり知らなかったし、もし知っていたとしてもそれは「ドイツ側からの情報」であった。参加者の大多数にとっては、「もっと重要なテーマに時間を割くことの方が重要」であり、このようなテーマについては「議論がどちらに転んでもあまり関係なかった」のである(89)。また、オリンピック・コングレスについては、1983年にミュラーによる詳細な研究［40］が発表されているが、そこではこうした「民族問題」についての議論には全くといっていいほど触れられていない。これはミュラー本人の責任というよりは、コングレスの公式記録において「民族問題」の占める比重が如何に小さいものであったかということの証左と見なすべきであろう。

おわりに

単独の団体としてベルリン大会に出場する可能性を奪われたチェコ・オリンピック委員会には、二つの道しか残っていなかった。すなわち、オーストリア・オリンピック委員会の傘下に入って、オーストリア代表団の一員としてオリンピックに出場するか、国際的に孤立することを覚悟でスポーツにおけるチェコの独自性を求めて活動し続けるか、のどちらかであった。しかしながら、第一次世界大戦が勃発してまだ間もない1914年11月、グートとレスラーは「政治犯の容疑」をかけられ、翌15年の春には、政治家のクラマーシュ（Karel Kramář）やシャイネルと共に逮捕されたのであった。1916年6月19日には、プラハ警察の署長であったクンツェ（Kunce）がチェコのスポーツについて以下のように報告している。

> チェコ人たちは、国権の要求をアピールできるのであれば、どんな機会をも逃さなかった。…最も微妙であったのがスポーツにおける「チェコ問題」であった。…［チェコ人は］対外的な場における独立の権利を求めていたのである。つまるところ、それは政治的な権利、すなわちスポーツ上の国権であった(90)。

この報告においてチェコ人の各体操・スポーツ団体は反体制的と見なされ、解散させられたのであった。そうした中で、1916年10月4日、グートは「自由意志に基づいて」チェコ・オリンピック委員会を解散する署名にサインし、IOC委員も辞任したのであった。ところが、1918年秋にハプスブルク帝国が崩壊すると、オリンピックにおける「チェコ問題」は全く予想されていなかった方法で解決されることとなる。つまり、チェコスロヴァキアの誕生により新たにチェコスロヴァキア・オリンピック委員会が設立されたために、チェコ人たちは、スロヴァキア人と共に、今度は国家を有するネイションとしてオリンピックに参加するようになったのである。結果論ではあるが、彼らは「オリンピック・ネイション」の定義を修正するのではなく、自らのネイションをステートに結びつけることによって、すなわち「ネイション・ステート（国民国家）」になることによってオリンピックに復帰したのであった。もちろん、戦間期に

おいても、新生チェコスロヴァキア国家に含まれるスロヴァキア人、ドイツ人、ハンガリー人の扱いをめぐる対立の火種は存在した(91)。

スポーツにおけるネイションの問題は、実は、オリンピックだけではない。オリンピックにおいてネイションと国家の問題が表面化してきたのとほぼ同じ時期において、サッカーやテニス、漕艇、フェンシング、格闘技・重量挙げ、アイス・ホッケーなど、ほとんどすべてのスポーツの分野において次々と国際組織が誕生し、組織への加盟条件をめぐって対立が発生していたのである。例えば、1901年に創設されたチェコ・サッカー同盟（ČSF）は、1904年に設立された国際サッカー連盟（FIFA, Fédération Internationale de Football Association）への加盟を07年のアムステルダムにおける総会で正式に承認されたものの、それに反対するオーストリア・サッカー同盟（Österreichischer Fussballverband）やドイツ・サッカー同盟（Deutscher Fussball-Bund）がFIFAのボイコットを宣言するに至り、対立が表面化した。結局、1908年にウィーンで開催されたFIFAの総会では「一国一団体」の原則が採用されたために、イギリス、ウェールズ、アイルランド、スコットランドと共にチェコはFIFAを追放されたのである。その後、これらの団体は、同年秋にFIFAを自由意志で脱退したフランスと共に、国際サッカー協会アマチュア連合（UIAFA, Union Internationale Amateur de Football Association）を結成したものの、1912年にフランスがFIFAに復帰したため、UIAFAは崩壊してしまう(92)。

オリンピックを始めとする各種のスポーツ競技は、第一次世界大戦前においては依然として萌芽期にあったし、スポーツをめぐっての対立は、第1章で明らかにしたように社会的に見ればまだまだインパクトの小さいものであったかもしれない。しかしながら、参加の単位が個人やクラブからネイションへと固定化され、しかも、そのネイションの定義が厳格化されていく過程には、ナショナリズム研究において無視できない問題が含まれているように思われる。以下、考え得る論点を二点提示し、それによって本稿を締めくくることにしよう。

まず第一に、オリンピックにおいてはそれぞれのネイションがお互いに同格なものとして現出する、という点が挙げられる。つまり、フランスやイギリスのような「世界的ネイション」もチェコ人のような「歴史なきネイション」も同じネイションとして競技場に登場するのであって、主権国家の有無や文化水準のレベルといった相違はここでは捨象されてしまう。国家的イヴェントとし

て開催されるようになった万国博覧会においては、国力の差が一望できる形で会場が造られたのに対し、オリンピックにおいては身体的能力の違いだけが問題となる。例えば、フィンランドのように国家を持たない小さいネイションであっても、1912年のストックホルム・オリンピックにおいてはスウェーデン、アメリカ、イギリスに次いで四番目に多くの金メダルを獲得し、自らの能力を内外に誇示することができたのである。そして、こうしたネイションの同格性が最も象徴的に示されたのが、1908年のロンドン大会から採用された入場行進という儀式であった(93)。ここでは、ネイションという名で呼ばれる集団が、それぞれに自らの旗とプラカードを持ち、アルファベット順という各集団の特性とは無関係の規準に基づいた順番で行進できたのである。チェコとオーストリア、フィンランドとロシアの間において、行進の順番や旗の有無といった一見すると些細でしかない問題をめぐって対立が表面化したのは決して偶然ではない。まさにこの入場行進において、チェコとオーストリアが、そしてフィンランドとロシアが対等なネイションとして扱われることの問題性がはっきりと意識されるようになり、国家の側がそれを看過できなくなったのである。

このように考えると、オリンピックが国家とネイションを結びつける、という第二の論点も理解することができよう。少なくともロンドン大会以降には、国家を有するネイションのみがオリンピックに出場すべきだという認識が広まってきており、オーストリアとチェコとの対立からも伺えるように、宮廷を始めとする国家エリートからオリンピックへの積極的な働きかけが出始めていたのであった。こうした動きが逆に、国家構成員を一つのネイションとして、すなわち一つの国民として統合しなければならないという国家側の自覚にもつながっていったとも考えられる。その意味では、オリンピックという国際的なイヴェントが国家によるナショナルな統合を促進させ、結果として、第一次大戦後において国民国家（ネイション・ステート）モデルが定着するうえでの一つの布石になったと推論することも可能であろう。

注

（1）1920年より、Jiří Stanislav Guth-Jarkovský と改名している。

（2）Pacina [46, p.136].

（3）1862年に創設された体操組織であり、1948年の社会主義化に伴って国内の体操団体が統一されるまでは、チェコ、あるいはチェコスロヴァキ

ア最大の大衆組織であった。当団体は、チェコ人、あるいはチェコスロヴァキア人というネイションとしての自覚を広範な層に浸透させるうえで大きな役割を果たしたと言えよう。ソコルについては、さしあたり、Nolte [44]、Waic [60] などを参照。

（4）オリンピック復興のアイデアが実際にクーベルタンの頭に浮かんだのは、ヨーロッパの古代オリンピア熱が最高潮に達していた1888年から1892年にかけてのことであったとマカルーンは推測している。マカルーン [38, p.292]。

（5）本稿においては、nation, Nation, národ に相当する日本語として「ネイション」を用い、nationality, nationalité, Nationalität, národnost に相当する日本語として「ナショナリティー」を用いる。しかしながら、「民族問題」や「国際主義」などのように日本語として定着している熟語については、括弧付きで「民族問題」、「国際主義」などと記す。

（6）マカルーン [38, p.12]。ちなみに、1977年の時点において、早川は日本におけるクーベルタン研究、およびオリンピック研究の現状を「不毛」である、と述べている。早川 [14, pp.85-86]。

（7）例えば、鈴木 [57, p.119] を参照。

（8）Coubertin [5, p.9]. また、クーベルタンはこの回想録[5]で、USFSA の五周年記念というのは虚偽であったことを告白している。オリンピック復活のアイデアを打ち上げるのに相応しい場とするために、五周年記念という名目をこの祝賀会に付け足したのであった。*Ibid., p.8.*

（9）アテネ大会の模様については、マカルーン [38, pp.385f.] を参照。

(10) 吉見 [61, pp.273-275]。

(11) Coubertin [5, p.59].

(12) Guth [12, p.57].

(13) ナチスとベルリン・オリンピックに関しては、デイヴィス[13]による研究が優れている。

(14) Coubertin [5, p.17]; Coubertin [3, pp.77-78].

(15) "Ke hrám olympickým" [19, p.146].

(16) ドイツにおける体操とスポーツの対立については、中村 [41, pp.100-106（山本徳郎執筆部分）] や唐木[17]を参照。

(17) Hradil [15, pp.377-378]. なお、ここで使われている「インターナショナル」という言葉には、労働者運動に対するのと同じように、「根無し草的態度」に対する非難の意味が込められている。これに対し、クーベルタンは1898年、コスモポリタニズムとインターナショナリズムを区別し、世界における人間の多様性を克服し放棄しようとするコスモポリタニズムではなく、そのような多様性を逆に尊重しようとするインターナショ

ナリズムを支持する立場を表明している。彼によれば、人類の中に存在する差異をお互いに尊重しあうインターナショナリズムは、少なくとも、「正しく理解された」愛国主義と相容れないものではなかった。マカルーン [37, pp.405-406]。

(18) Kössl [33, p.162].

(19) ただし、注意しなければならないのは、当時の体操家たちも古代オリンピアに対する強い憧れを持っていたことである。ソコル創設者の一人、ティルシュ（Miroslav Tyrš, 1832-1884）は、1868年の著作『オリンピアの祭典』[58]において、ネイションの祭典としてのオリンピア競技を賛美している。彼によれば、古代オリンピックの選手は自分自身の為に勝利を求めるのではなかった。あくまで、祖国を守る意志と能力を見せるために競技に参加するのであって、勝利をおさめたとしても報酬は受け取らないのであった。古代ギリシアでは個人が全体の為に尽くすのであり、オリンピック競技はその姿勢を公衆の前に示す象徴的な場所であった。Tyrš [58, p.38]. ソコルの会長を務めたシャイネルもまた、数年に一度開かれるチェコ人のソコル大会（sokolský slet）こそが「真のオリンピアーダ」であると表現している。Scheiner [52,54]. ちなみに、1912年の第六回ソコル大会においては、こうしたギリシア人の理想をチェコ人の間で復活させるために、紀元前490年におけるマラトン（マラソン）の戦いを再現する劇が行われている。ここでは、千名を越えるソコル会員がギリシア人として登場し、勝利を伝える兵士のマラトンからの帰還 —— マラソン競技の起源 ——、ペルシア人に対する勝利を喜ぶ祝典、締めくくりとしての古代五種競技を行ったのであった。Památník [48, pp.153-188] を参照。

また、オーストリア・ドイツ人の体操家たちの間でも古代オリンピアに対する関心は存在しており、実際、1886年には第一ウィーン体操協会の創設25周年行事として古代ギリシア五種競技が行われている。なお、この時、競技の提唱者であるキースリング（Franz Kießling）本人が非アーリア人、特にユダヤ人の参加を認めないと主張したために物議を醸しだしている。Mehl [39, p.86].

このように、体操家たちの関心はあくまでネイションの行事としてのオリンピックであり、インターナショナリズムを建前とするクーベルタンのオリンピックとは相容れないものであった。

(20) 1896年10月5日付のグートからクーベルタンへの書簡。In Dokumentace [34, vol.1, p.24].

(21) この中間大会は、オリンピックを常にアテネで行おうとするギリシア政府と毎回異なる場所でオリンピックを開催しようとするIOCとの間の妥協として生じたものであった。1830年に独立を果たしたギリシア政府

特に、まだネイションの間で定着しきれていなかった王族にとって、オリンピックは、自らの権威を中心にしてネイションを統合させる格好の道具となった。1896年におけるアテネ大会が成功してからは、それまでの反対派も含めて、その後のオリンピックを恒常的にアテネで開くことを要求するようになったのである。しかしながら、クーベルタンを初めとするIOCがそれに強硬に反対したこともあって、1904年、1908年と4年ごとに開催される正規オリンピックの中間、すなわち1906年、1910年というふうにギリシアでオリンピックを開催することが決定された。ただし、ギリシア内部における政治的混乱の為、実際に行われたのは1906年だけである。なお、現在では、この中間大会は正式のオリンピックと見なされていない。

(22) Scheiner [53, pp.63-64].

(23) Guth [12, p.181].

(24) Guth [12, p.194]. グートは以下のように書いている。「オリンピックにあまり大きな関心を持っていなかったシャイネル博士は、どちらかというと単なる受動的な観客としてこの闘い［パリ・コングレスのこと］に参加していたのであった。ただし、思いやりのある観客であったと言うこともできるのだが…」

(25) Kössl [33, p.169].

(26) Pelikán [50, pp.28-32].

(27) 例えば、クーベルタンは当時のスポーツ界に存在していた対立を以下のように表現している。「19世紀のスポーツ選手たちは、ある種のスポーツの技術が、別の種類のスポーツで必要とされる技術とは異なるものであり、実際問題として両立しないものだという確固とした信念を抱いていた。フェンシングの選手がボクシングをすれば身体が損なわれるのであった。漕艇の選手であれば、鉄棒に対して警戒を払わねばならなかった。当時の馬術の選手であれば、徒競走やサッカーをすると考えただけで吐き気を催すのであった。唯一例外的に不信感を呼び起こさなかったのは、水泳とその当時まだ生まれたばかりであったテニスである。とはいえ、テニスはエレガントな気晴らしにすぎなかったし、水泳は健康に良いという理由で推奨されたり、事故に遭った場合や溺れている人間を救助する場合に役立つ実用的な慣習と見なされていただけであった。」Coubertin [5, p.10]. 他にCoubertin [2, p.12] も参照。

(28) オリンピックの成功を妨げるもう一つの要因として、当時の独仏対立を挙げておくべきであろう。例えば、1894年のパリ・コングレスにおいて、ドイツ人を参加させるべきかどうかが大きな争点となっていたのである。この時、対独報復を唱えていたフランス体操連合（Union des So-

ciétés de gymnastique de France）の会長、サンブッフ（Joseph Sanboeuf, 1848-1938）が、もしドイツ人がコングレスに参加するのなら同連合を会議から撤退させる、とクーベルタンを脅したのであった。結果として、当コングレスに参加したドイツ人はライフェンシュタイン男爵唯一人であったが、彼は「公式」使節ではなかったので、サンブッフも腹を立てず、体操団体の撤退はしないことに同意したという。Coubertin [5, p.17]; Coubertin [3, p.77]; マカルーン [38, p.338].

(29) Guth [12, p.34].

(30) この時点において、クーベルタンがソコルをどの程度知っており、どの程度積極的にソコルをオリンピックに参加させようと考えていたかは不明である。少なくともここで確認できるのは、1891年にグートと対面した時にソコルのことが話題に出たことである。また、1889年にパリで開催された第15回フランス体操家連合の大会において、ソコルが外国人競技で一位から三位までを独占したことをクーベルタンが知っていた可能性も高い。そもそも、1894年のコングレスには、グートの他にもチェコのソコルとスポーツ・クラブのスパルタ(AC Sparta) に招待状が出されていることを考えると、クーベルタンはソコルの存在をよく知っていたと考えられるが、彼本人がソコルについて何も書いてない以上、コラーシュの言うように、ソコルに大きな関心を持ち、オリンピックにソコルを参加させるべく積極的に努力していた、とは言い難い。Kolář [25, p.712, n.16] を参照のこと。

(31) Guth [12, p.41].

(32) 初期のオリンピック大会では、勝利を祝う式と表彰式とは別個に行われ、各競技の後には前者が、最終日には後者がまとめて行われた。マカルーン [38, pp.427-428]。 両者が一緒になった形式がとりいれられたのは、1932年ロサンゼルス大会からである。同上 [38, p.622, n.168]。アテネ大会では当初、勝利の式典においては国旗掲揚はあっても国歌吹奏はなかったようである。だがマラソンでギリシア人ルイスが優勝し、国歌吹奏を求める声が群衆の中から湧きあがり、以後習慣として定着した。なお、1896年のアテネ大会で表彰されたのは一位と二位だけであり、三位は表彰されていない。また、1906年のアテネ中間大会においても一位と二位のみが表象されたことを考えると、三位までが表彰の対象となったのは金・銀・銅のメダルの授与が規約の中で明記された1908年のロンドン大会からではないかと思われる。この点に関しては、Cook [1, pp.84-85] および、ロンドン大会一般規程第15条（Fourth Olympiad [9, p.30]; Cook [1, p.173]）を参照。

(33) Guth [11, p.145]; Guth [10, pp.184-185].

(34) 1896年5月14付のグートからクーベルタンへの書簡。In Dokumentace [34, vol.1, p.19].

(35) Guth [11, p.145]; Guth [10, p.189].

(36) ただし、当局によって強制的に解散させられることを恐れたグートは、オーストリア・ハンガリー時代においては正式な認可申請をせず、規約を持たない団体のまま組織を維持したのであった。Guth [12, pp.78,43-44, 120]; Pavlousek [49, p.6]. また、グートたちは、オリンピック委員会の成立を1896年と主張していた。ケスルは、この点について、オーストリア・オリンピック委員会への対抗上、自らの古さを強調するために彼らが成立年を偽ったのではないかと推測している。Kössl [31, pp.19-20].

(37) Kolář [24, pp.309-311]. なお、National Olympic Committeeは、日本では「国内オリンピック委員会」と訳されているが、本稿では、さしあたり「ナショナル・オリンピック委員会」と表記する。

(38) " Olympické hry r.1900 v Paříži ", *Sport,* Vol.1, 10. May 1899, p.2 (quoted in Manuscript [35, p.5]).

(39) 文献によっては、彼はアメリカ人と扱われている場合もある。

(40) Niedermann [42, pp.42-43].

(41) Guth [12, pp.59-64].

(42) Niedermann [42, p.38].

(43) *Illustrierte Wiener Extrablatt,* 12. Feb. 1896 (quoted in Niedermann [42, p.40]).

(44) Coubertin [5, p.57].

(45) チェコとボヘミアという言葉については注意が必要である。現在のチェコ共和国に相当するチェコ諸領邦は、当時のボヘミア（Čechy, Böhmen）、モラヴィア（Morava, Mähren）、シレジア（Slezsko, Schlesien）の三つの地域から成り立っていたが、英語圏やフランス語圏においては、チェコ諸領邦全体を指す場合にも、ボヘミアだけを指す場合にも、厳密に区別されることなく「ボヘミア（Bohemia）」や「ボエーム（Bohéme）」という名称が使われていたと思われる。

(46) *Allgemeine Sport Zeitung,* 25. Sep. 1904. (quoted in Niedermann [42, p.32]).

(47) Guth [12, pp.68f.].

(48) "Die Olympischen Spiele in Athen," *Deutsche Turn-Zeitung,* Vol.51, No.18, p.330. (quoted in Lennartz [36, p.3]).

(49) Rössler [51, p.115].

(50) Rössler [51, pp.115-116].

(51) 鈴木 [57, p.124]。

(52) Fourth Olympiad [9, pp.29-31]; Cook [1, pp.171-174].

(53) 鈴木 [57, p.120]。Coubertin [5, p.88].

(54) *Deutschösterreichische Turnzeitung,* 1908, p.433. (quoted in Niedermann [42, p.28].)

(55) Dokumentace [34, vol.1, pp.66-67,76-77].

(56) 1908年12月29日付のクーベルタンからゾルムス＝ブラウンフェルスへの書簡の草稿。In Dokumentace [34, vol.1, pp.78-79].

(57) Guth [12, p.77].

(58) Coubertin [5, pp.118-122].

(59) Guth [12, p.127].

(60) Fifth Olympiad [8, p.93].

(61) Coubertin [5, pp.120-121]. なお、チェコ語版 [4, p.90] においては、「国 (pays)」は「ネイション (národ)」と訳されている。

(62) Quoted in Kolář [22, p.719].

(63) ただし、1929年に出版された回想録を見ると、当時のグートは「ボヘミア」という名称に含まれている矛盾を自覚しており、「ボヘミア」に対してそれほど強い執着心を持っていなかったという。「ボヘミア」という名称にはモラヴィアとシレジアが含まれていないし、「ボヘミア」内部におけるドイツ人住民が含まれてしまう、というのがその理由であった。Guth [12, pp.112-113]. その意味では、「ボヘミア (Bohéme)」よりは「チェコ人 (Tschéques)」という名称の方が正確であったが、「チェコ人」という名称は、ボヘミア国権の観点が抜け落ちてしまうという点で「嫌悪すべき」ものであった。

(64) Kolář [22, p.720].

(65) "Art der Bezeichnung der Teilnehmer böhmischer Nationälitat an den olympischen Spielen in Stockholm", Praha, LA PNP, fond Guth-Jarkovský [国立文献博物館文書アルヒーフ、グート・コレクション]. (quoted in Kolář [22, p.720]).

(66) チェコ・オリンピック委員会の正式名称。Český výbor pro hry olympijské.

(67) チェコ・オリンピック委員会のこと。Comité Olympique Tschéque の略号。

(68) 話し合いにおいては、オーストリア側は帝国旗と併せて掲揚されるチェコの旗は三角旗 (Wimpel) に限ると主張していたが (Guth [12, p.133])、この点についてはチェコ側の主張が通り、長方形の旗を揚げることが認められたのであった。

(69) Kolář [22, pp.720-721].

(70) ボヘミア出身の貴族でグートと同じギムナジウムの出身。そのためかどうかは定かではないが、彼はオーストリア側では最もチェコに好意的

な人物であった。Guth [12, pp.125-126].

(71) Rössler[51, pp.117,150]; Guth[12, p.148].

(72) 紋章の使用許可を獲得するうえで、大きな働きをしたのはチェコ・オリンピック委員会の後援者であったロプコヴィッツ公子（Prinz Ferdinand Lobkovicz）であった。グートは、彼がボヘミア総督のトゥーン伯爵（František Antonín Graf Thun-Hohenstein, 1847-1916）に圧力をかけ、皇帝が事の本質を良く理解しないまま、紋章の使用許可にサインをしてしまったのではないかと推測している。Guth [12, p.139].

(73) Rössler [51, p.117].

(74) Guth [12, p.148].

(75) Kutassi [43, p.182]. 1908年のロンドン大会の場合には、英語のアルファベット順ではハンガリー（Hungary）がオーストリア（Austria）の後ろになるため特に問題は生じなかったが、スウェーデン語においてはオーストリア（Österrike）の頭文字である Ö がアルファベット順では一番最後になるため、原則から考えればハンガリー（Ungern）の後に行進することが予想された。このため、オーストリアとハンガリーの一種の妥協として、オーストリア、チェコ、ハンガリーの順番となったようである。

(76) スポーツ大事典［21, p.144（桑原一良執筆部分）］。

(77) Manuscript [35, pp.30-31].

(78) ここでは、Dokumentace [34, vol.1, pp.117-120] に収録されている草案を基にしている。

(79) 1913年12月30日付のヴィンディシュグレーツからクーベルタンへの書簡。Dokumentace [34, vol.1, pp.121-122]. 他に Guth [12, pp.156-157] を参照。

(80) *Sport a hry*, Vol.13, No.1, p.11, 1914; Guth [12, p.196]. 残念ながら当団体についてはこれ以上の情報は見つかっていない。Manuscript [35, p.29, n.101]、Dokumentace [34, vol.1, p.122, n.4] を参照。

(81) Müller [40, p.76, n.3].

(82) Manuscript [35, pp.32-33].

(83) Guth [12, p.191].

(84) Guth [12, pp.197-198].

(85) *Rheinisch-Westfälische Sportzeitung*, Vol.3, No.26, 1914, p.4. (quoted in Lennartz [36, p.5]). この記事によれば、当セッションにおいては、クーベルタンとドイツのホルニング（Horning）が交代で司会を務めていたようである。当時、クーベルタンは病気のために散発的にしかこのコングレスに参加していないが、レンナルツは、これは戦略的なものであったのではないかと推測している。Lennartz [36, p.10, n.25]. なお、このパリ・コングレスの終了直後に第一次世界大戦が勃発したため、議事録は出版さ

れていない。1919年にはIOCより当コングレスの決定事項だけを記した9頁の報告書が出されているが、そこには、こうした「民族問題」に関する議論については記されていない。また、オーストリアでは、少なくとも、ウィーンの『フレムデンブラット』(Fremdenblatt)において、「チェコ人とパリ・コングレス(Die Czechen und der Pariser Kongreß)」というタイトルでこの件についての報道が行われている。Pál [47, p.349]; Niedermann [42, p.33].

(86) Guth [12, pp.194-195].

(87) Guth [12, p.203].

(88) このコングレスにおけるハンガリーの主たる関心は、クタッシの通史によれば、1920年のオリンピックの開催地としてブダペストが選出されるかどうかであった。Kutassi [43, pp.190-191]. つまり、オリンピックにおけるハンガリーの地位が危険にさらされている、という差し迫った認識はこの時点ではなかったと考えられる。確かに、1867年にアウスグライヒ（和協）をウィーン政府から引き出すことに成功したハンガリーは、形のうえでは帝国の西半分であるオーストリアと同等の地位を得、帝国崩壊までオーストリア側の一部に留まったチェコよりは優位な立場を保持していた。すなわち、共通業務と呼ばれる財政・外交・軍事を除けば、ハンガリーはオーストリアと同様に独自の議会と内閣を持ち、オーストリア・ハンガリー二重帝国の一翼を成したのである。しかしながら、ウィーン政府は、依然として帝国の統一チームによるオリンピックへの参加を望んでおり、チェコは「従属的な地位」、ハンガリーは「二流の地位」しか持たないという考えを捨ててはいなかった。したがって、1916年予定のオリンピックでチェコを排除することに成功したウィーン政府が、次に攻撃の矛先をハンガリーに向けてくる事態は当然予想されることであった。ハンガリー側がオリンピックのブダペスト誘致に熱心であったのは、そうしたことに対する危機感が背景にあったためかもしれない。

(89) Guth [12, pp.201-202].

(90) Guth [12, pp.233-234].

(91) 少なくとも、チェコスロヴァキア代表としていわゆるズデーテン・ドイツ人がオリンピックに参加していた点は確認されている。Lennartz [36, p.6].

(92) サッカーについては、Kaufman [18, pp.28-29]、Guth [12, pp.235-239]、Kolář[26, pp.183-184; pp.188-189, n.99] などを参照。

(93) この点については、東京外国語大の篠原琢氏から非常に貴重な示唆をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

参考文献

[1] Theodore Andrea Cook. *The Olympic Games: Being a Short History of the Olympic Movement from 1896 up to the Present Day, Together with an Account of the Games of Athens in 1906, and of the Organisation of the Olympic Games of London in 1908.* London, 1908.

[2] Pierre de Coubertin. *The Olympic Idea: Discourses and Essays.* Carl-Diem-Institut, Köln, 1966.

[3] Pierre de Coubertin. *Einundzwanzig Jahre Sportkampagne (1887-1908).* Carl-Diem-Institut, 1974. *(Une Campagne de vingt-et-un ans (1887-1908),* Paris. 1909). Trans. by G. Klitscher.

[4] Pierre de Coubertin. *Olympijské paměti.* Olympia, Praha, 1977. Translated by Jiří Kroutil. Coubertin[5] のチェコ語版.

[5] Pierre de Coubertin. *Mémoires Olympiques.* Revue EP.S., Paris, 1996. (Réimpression de l'Edition Bureau International de Pédagogie Sportive, Lausanne, 1931). (ピエール・ド・クベルタン著. カール・ディーム編. 大島鎌吉訳.『オリンピックの回想』. ベースボール・マガジン社, 1962, 1976[2]). 本稿を準備する過程で目を通したのは、1977年に出版された本書のチェコ語版 [4] であったが、実際に引用するに当たっては仏語原文から訳出した。なお、残念ながら、独語版からの重訳である日本語版には誤訳が多い。

[6] Jindřich Dejmek and Josef Hanzal, editors. *České země a československého v Evropě XIX. a XX. století: Sborník prací k 65. narozeninám prof. dr. Roberta Kvačka* [19・20世紀のヨーロッパにおけるチェコとチェコスロヴァキア——R. クヴァチェク教授65歳記念論文集]. Historický ústav AVČR, Praha, 1997.

[7] Bohumila Ferenčuhová, editor. *Francúzsko a stredná Európa: Vzt'ahy medzi Francúzskom a strednou Európou v rokoch 1867-1914. Vzájomné vplyvy a predstavy: Meteriály z česko-slovensko-francúzskeho kolokvia historikov, Bratislava 12.-13. novembra 1992/ La France et l'Europe centrale.* Academic Electronic Press, Bratislava, 1995.

[8] *The Fifth Olympiad: The Official Report of the Olympic Games of Stockholm 1912.* Stockholm, 1913. The Swedish Olympic Committee, Edited by Erik Bergvall, Translated by Edward Adams-Ray.

[9] *The Fourth Olympiad being the official report of the Olympic Games of 1908 celebrated in London under the patronage of His Most Gracious Majesty King Edward VII and by the sanction of the International Olympic Committee.* London, 1908. Issued under the Authority of the British Olympic Council,

Written by Theodore Andrea Cook.

[10] Jiří Stanislav Guth-Jarkovský. *Hry olympické za starověku a za dob nejnovějších* [古代におけるオリンピック競技と同時代におけるオリンピック競技]. Praha, 1896.

[11] Jiří Stanislav Guth-Jarkovský "O hrách olympických r. 1896" [1896年のオリンピック競技について]. *Sokol,* Vol. 22, No. 6, pp. 124-125; No.7, pp.144-145, 1896.

[12] Jiří Stanislav Guth-Jarkovský. *Paměti olympijské 1894-1918* [オリンピックの回想 1894-1918年]. Praha, 1929. Vol.2 of *Paměti.*

[13] ダフ・ハート・デイヴィス，岸本完司訳.『ヒトラーへの聖火――ベルリン・オリンピック』. 東京書籍，1988. (Duff Hart-Davis, *Hitlers Games,* Century Hutchinson, 1986).

[14] 早川武彦.「日本における『クーベルタン像』について」.『一橋論叢』，77巻1号，pp.85-92, 1977.

[15] A. Hradil. "Sport a tělocvik sokolský (Časová úvaha)" [スポーツとソコル体操（今日的考察）]. *Věstník Sokolský,* Vol.4, No.18, pp.321-323; No.19, pp.337-339; No.21, pp.377-379; No.23, pp.425-427; No.24, pp.445-447, 1900.

[16] Rudolf Jahn, editor. *Sudetendeutsches Turnertum: Im Auftrag der Arbeitergemeinschaft sudetendeutscher Turner und Turnerinnen in der Sudetendeutschen Landmanschaft.* Heimreiterverlag, Frankfurt am Main, 1958. 2 parts.

[17] 唐木国彦.「『トゥルネン＝スポーツ抗争』と労働者体育家連盟」.『一橋論叢』，77巻1号，pp.21-40, 1977.

[18] Josef V. Kaufman. *Třináct let bojů proti Vídni o uznání české samostatnosti ve sportu footballovém* [サッカー・スポーツにおけるチェコの独立性を求めての13年間にわたるウィーンに対する闘い]. Praha, 1910. Otisk článků vycházejících od 2.11.-3.12.1910 v deníku české strany pokrokové "Čas".

[19] "Ke hrám olympickým" [オリンピック競技によせて]. *Sokol,* Vol.22, No.7, p.146, 1896.

[20] 日本オリンピック委員会.『近代オリンピック100年の歩み』. ベースボール・マガジン，1994.

[21] 岸野雄三ほか編，日本体育協会監修.『最新スポーツ大事典』([正編]および資料編). 大修館，1987.

[22] František Kolář. "Boj za samostatnou českou účast na V. Olympijských hrách 1912 ve Stockholmu" [1912年の第五回オリンピックにおけるチェコ単独の代表権を求める闘い]. *Teorie a praxe tělesné výchovy,* Vol.25, No.12, pp.717-722, 1977.

[23] František Kolář. "Jednání o českém sportovně politickém programu v roce 1913" [1913年のチェコ・スポーツ政治綱領をめぐる交渉]. *Teorie a praxe tělesné výchovy,* Vol.27, No.6, pp.323 − 327, 1979.

[24] František Kolář. "Vznik českého olympismu a založení Českého výboru pro hry olympijské". [チェコ・オリンピック運動とオリンピック・チェコ委員会の始まり]. *Sborník k dějinám 19. a 20.století,* Vol.6, pp. 303-325, 1979.

[25] František Kolář. " 'Česká otázka' a mezinárodní olympijský kongres v Paříži v roce 1914" [「チェコ問題」と1914年パリ・オリンピック・コングレス]. *Teorie a praxe tělesné výchovy,* Vol.29, No.12, pp.709-713, 1981.

[26] František Kolář. "Nesmiřitelná rivalita Slavie a Sparty (Kapitola z počátků českého fotbalu)" [スラヴィアとスパルタの和解不可能なライヴァル関係(初期のチェコ・サッカーについての一章)]. 1997. In Kvaček [6, pp.165-190].

[27] František Kolář and Jiří Kössl. "Origin and Development of the Czech and Czechoslovak Olympic Comittee". *Citius, Altius, Fortius,* Vol.2, No.3, pp.11-26, 1994.

[28] František Kolář and Jiří Kössl. "Pierre de Coubertin a Čechy/ Pierre de Coubertin et la Bohême". 1995. In Francúzsko [7, pp.136--151].

[29] Jiří Kořalka. *Češi v habsburské říši a v Evropě 1815-1914: Sociálněhistorické souvislosti vytváření novodobého národa a národnostní otázky v českých zemích.* Argo, Praha, 1996. (*Tschechen im Habsburgerreich und in Europa 1815-1914: Sozialgeschichtliche Zusammenhänge der neuzeitlichen Nationsbildung und der Nationalitätenfrage in böhmischen Ländern,* München. 1991) Translated and revised by the Author.

[30] Jiří Kössl. "Vznik českého výboru pro hry olympijské a jeho kontinuita v ČSOV" [チェコ・オリンピック委員会の成立とチェコスロヴァキア・オリンピック委員会におけるその継続性]. *Teorie a Praxe tělesné výchovy,* Vol.21, No.7, pp.388-393, 1973.

[31] Jiří Kössl. *Dějiny československého olympijského hnutí.* [チェコスロヴァキア・オリンピック運動の歴史]. Olympia, Praha, 1977.

[32] Jiří Kössl, editor. *Příspěvky k historii českého a mezinárodního olympijského hnutí* [チェコおよび国際オリンピック運動史論文集]. No.9 in Olympijská knihovnička. Český olympijský výbor, Praha, 1995. チェコ・オリンピック委員会内部資料.

[33] Jiří Kössl. "Sokol a olympismus" [ソコルとオリンピズム]. 1996/97. In Waic [60, pp.160-174].

[34] Jiří Kössl, et al., editors. *Dokumentace k dějinám českého olympismu* [チェ

コ・オリンピック史に関する資料集]. No.14 & 17 in Olympijská knihovnička. Český olympijský výbor, Praha, 1998. Vol.1 1891-1918, Vol.2 1918-1945. チェコ・オリンピック委員会内部資料.

[35] Jiří Kössl and František Kolář. "První etapa českého olympismu (1894-1918)". Praha, 1998. Manuscript. チェコ・オリンピック委員会設立百周年記念として1999年に出版が予定されているチェコ・オリンピック史の草稿の一部。コピーを提供していただいたケスル氏とコラーシュ氏に感謝申し上げる。

[36] Karl Lennartz. Český a československý olympijský výbor na pozadí politického napětí z pohledu německých pramenů" [政治的緊張の影響を受けるチェコ、およびチェコスロヴァキア・オリンピック委員会 —— ドイツ語の資料を基にして]. 1995. In Příspěvky [32, pp.2-11].

[37] ジョン・J. マカルーン (編), 光延明洋他訳. 『世界を映す鏡 —— シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック』. 平凡社, 1988. (John J. MacAloon, editor. *Rite, Drama, Festival, Spectacle: Rehearsals Toward a Theory of Cultural Performance,* Institute for the Study of Human Issues, 1984).

[38] ジョン・J. マカルーン, 柴田 元幸・菅原克也訳. 『オリンピックと近代 —— 評伝クーベルタン』. 平凡社, 1988. (John A. MacAloon. *This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games,* Univ. of Chicago, 1981).

[39] Erwin Mehl. "Deutsches Turnen: seine Vorläufer und seine Begleiter in den Länder der böhmischen Krone von den Anfängen bis 1918". 1958. In Jahn [16, part 1, pp.9-124].

[40] Norbert Müller. *Von Paris bis Baden-Baden: Die Olympischen Kongresse 1894-1981.* Schors-Verlag, Niedernhausen/ Taunus, 1983[2].

[41] 中村敏雄 (編). 『スポーツナショナリズム』(スポーツを考えるシリーズ5). 大修館書店, 1978.

[42] Erwin Niedermann. *Die Olympische Bewegung in Österreich: Von den Anfängen bis 1994.* Österreichisches Olympisches Comité, Wien, 1995.

[43] Erwin Niedermann and László Kutassi. *Die Olympische Bewegung in Österreich und Ungarn von den Anfängen bis 1918.* Wien, 1990. edited by Österreichisches Olympisches Comité.

[44] Claire E. Nolte. "'Our Task, Direction and Goal': The Development of the Sokol National Program to World War I". In Seibt [55, pp.123-138].

[45] 日本オリンピック委員会監修, 日本オリンピックアカデミー編. 『オリンピック事典』(ほるぷ体育スポーツ科学選書14). プレス ギムナスチカ／ほるぷ出版, 1982.

[46] Václav Pacina. *Sport v Království českém* [ボヘミア王国のスポーツ].

No.46 in Edice archiv. Mladá fronta, Praha, 1986.

[47] Pál. "Češi a olympijské hry" [チェコ人とオリンピック]. *Sport a hry,* Vol.13, No.22, pp.349-350, 13. June 1914.

[48] *Památník sletu slovanského sokolstva roku 1912 v Praze.* [1912年プラハにおけるスラヴ・ソコル大会記念論集]. Praha, 1919.

[49] Vítězslav Pavlousek. "Oslava třicetiletí československého výboru olympijského" [チェコスロヴァキア・オリンピック委員会三十周年記念]. *Olympijský věstník,* Vol.5, No.41, pp.5 － 7; No.42, pp.17-19, 1927.

[50] Jan Pelikán. *Sokolstvo a sport* [ソコルとスポーツ]. No.37 in Sbírka sokolských přednášek. Praha, 1931.

[51] Josef Rössler-Ořovský. "Z odboje českého výboru olympijského proti Rakousko-Uhersku: Ze vzpomínek generálního sekretáře" [チェコ・オリンピック委員会のオーストリア・ハンガリーに対する抵抗より ―― 事務局長の手記をもとに]. *Olympijský věstník,* Vol.1, No.8, pp.113-117; No.10, pp.150-153, 1924.

[52] Josef E. Scheiner. "K našim Olympiadám" [我々のオリンピアーダによせて]. *Sokol,* Vol.27, No.1, pp.2-3, 1901.

[53] Josef E. Scheiner. "Hry olympijské v Athénách a Sokolstvo" [アテネにおけるオリンピック競技とソコル]. *Národní listy,* Vol.46, No.131, p. 13, 13. May 1906. Reprint in Dokumentace [34, vol.1, pp.63-65].

[54] Josef E. Scheiner. "Na prahu naší Olympiady" [我々のオリンピアーダの開催に当たって]. *Sokol,* Vol.33, No.2, pp.25-26; No.3, pp.49-50; No.4, pp.71-72; No.5, pp.95-96, 1907.

[55] Ferdinand Seibt, editor. *Vereinswesen und Geschichtspflege in den böhmischen Ländern.* R. Oldenbourg, München, 1986.

[56] 鈴木良徳.『オリンピック外史 ―― 第一次大戦をはさんだ二つの大会』. ベースボールマガジン社, 1980.

[57] 鈴木良徳, 川本信正.『オリンピック史』. 日本出版共同株式会社, 1952.

[58] Miroslav Tyrš. *Hod olympický* [オリンピアの祭典]. 1868. In Tyrš [59, vol.1, pp.37-56].

[59] Miroslav Tyrš. *O sokolské idei.* [ソコルの理念について]. Praha, 1930. 2 vols.

[60] Marek Waic, et al. *Sokol v české společnosti 1862-1938 (Sokol in der tschechischen Gesellschaft).* FTVS UK, Praha, 1996/97.

[61] 吉見俊哉.『博覧会の政治学 ―― まなざしの近代』. 中公新書, 1992.

［付記１］本稿の執筆にあたっては、カレル大学体育・スポーツ学部のケスル氏（Jiří Kössl）と科学アカデミー歴史研究所のコラーシュ氏（František Kolář）に色々とご助力いただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

［付記２］参考文献［35］は、本稿脱稿後に以下のタイトルで出版された。
Český olympismus. Olympia, Pnaha, 1999.

写真１．出典：*Český olympismus*, p.30
1912年ストックホルム大会　チェコの入場行進

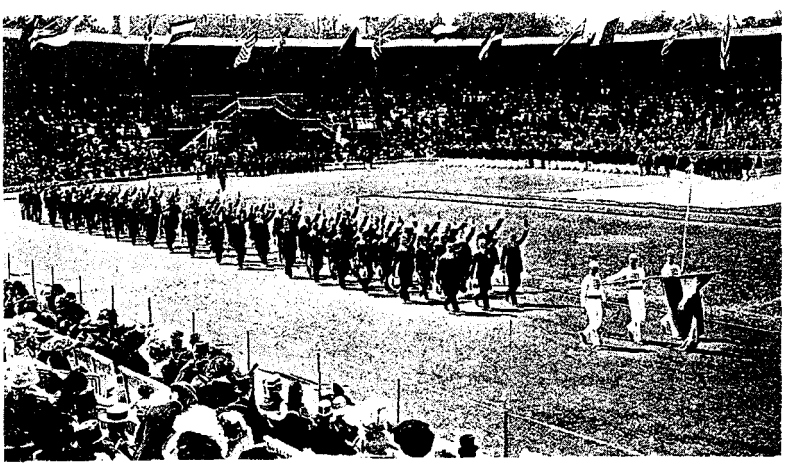

写真２．出典：Fifth Olympiad [8]
1912年ストックホルム大会　ハンガリーの入場行進

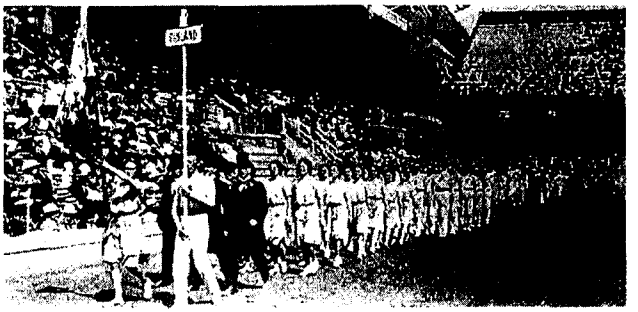

写真３．出典：スポーツ大事典 [21, p. 144]
1912年ストックホルム大会　フィンランド（旗あり）

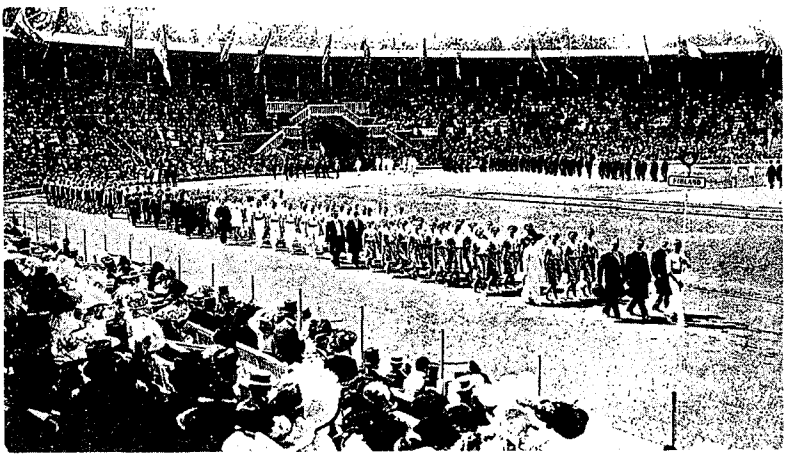

写真４．出典：Fifth Olympiad [8]
1912年ストックホルム大会　フィンランド（旗なし）

写真５．出典：Dokumentace [34, vol.I]
1912年のストックホルム大会でチェコ人が用いた記章と旗

Začátek moderního olympijského hnutí a metamorfóza pojmu "národ"

Z činnosti Českého olympijského výboru

Hiroshi FUKUDA *

Cílem této práce je zkoumání metamorfózy pojmu 'národ' v olympijském hnutí na základě činnosti české strany před První světovou válkou.

Jiří Guth, pozdější zakladatel Českého olympijského výboru (ČOV), byl jmenován roku 1894 členem Mezinárodního olympijského výboru (MOV) stejně jako Mad'ar Ferenc Kemény. Pak se Guth angažoval v olympijském hnutí a od roku 1900 měl na starosti českou výpravu na olympijské hry (OH). Je však zajímavé, že Češi a Mad'aři startovali na olympijských hrách jako samostatné skupiny, přestože České země a Uhersko tehdy nebyly samostatnými státy, ale částmi Rakousko-uherské monarchie. OH však postupně dostaly politický význam a staly se 'státní záležitostí', proto rakouská vláda začal plánovat vyloučení Čechů z OH jako samostatné skupiny. Následkem tohoto konfliktu byli Češi a Finové (patřili k Rusku) na Pařížském kongresu roku 1914 fakticky vyloučeni z OH. Na tomto kongresu bylo rozhodnuto, že jen 'politický národ', totiž národ mající svůj suverénní stát, může startovat v příštích OH, které se měly konat roku 1916 v Berlíně. Od 2. až do 5. části této práce jsem vysvětloval tento proces konkrétně a pokoušel se objasnit metamorfózu pojmu 'národ' v olympijském hnutí.

Domnívám se však, že toto zkoumání nemůže objasnit celý proces 'nation-building' v české společnosti. Boj o samostatnou účast na OH totiž nemohl upoutat příliš velkou pozornost veřejnosti. Jen málo lidí aktivně podporovalo ČOV a proto Guth musel bojovat o české samostatné postavení skoro sám. Olympijské hry samy nebyly tenkrát tak atraktivní věcí jako hry dnešní. Byl i spor mezi sportem a tělocvikem. Např. čeští

* Research Fellow, School of Law, Hokkaido University.

télocvikáři sokolové si mysleli, že sport není národní, ale spíš individuální věc, a nese i riziko poškodit tělesnou rovnováhu. Sokol proto zachovával negativní postoj ke sportu důsledně, zejména k OH konaným nejméně do První války. Zkrátka řečeno tehdejší olympijské hnutí mělo jen periferní postavení ve celé společnosti, jak jsem popisoval v 1. části. Z této perspektivy nemůžeme říct, že ve metamorfóze pojmu 'národ' v olympijském hnutí se naprosto odrážel proces 'nation-building'.

Tato práce vznikla hlavně na základě práce Jiřího Kössla a Františka Koláře[22-25,27,28,30,31,35]. Můžeme také prohlížet na korespondenci mezi důležitými osobami, totiž Guthem, Coubertinem a Windischgrätzem, jako na uspořádanou dokumentaci[34]. Pokud jde o rakouskou stranu, máme knížku Erwina Niedermanna[42,43]. O mad'arském hnutí jsme informováni díky práci Lászlóa Kutassiho[43]. Co se německé strany týče, je článek Lennartze[36] užitečný, i když má jen stručný výklad. Jako primární materiál nemůžeme opomenout paměti Coubertina[5] a Gutha[12].

Tato práce nemá v úmyslu nijak odhalovat nová fakta, ale položit důraz na důležitost národní otázky v olympijském hnutí. To, že Češi bojovali o samostatnou účast na OH, by jistě stálo za ještě širší diskusi o národu a nacionalismu na konci 19. století.

[poznámka] Chtěl bych zde poděkovat panu Jiřímu Kösslovi (FTVS UK) a panu *Františku Kolářovi (Historický ústav AVČR), kteří mi poskytli důležitou informaci a* kopii několika článků.